

価値観変化と政治変動：R・イングルハートの理論 枠組み

金丸，裕志
九州大学大学院法学研究科博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/16356>

出版情報：政治研究．44，pp.41-96，1997-03-31．九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：



価値観変化と政治変動

— R・イングルハートの理論枠組み —

はじめに

第一章 「静かなる革命」の基本図式 — 一九七〇年代 —

第一節 価値観変化

第二節 マクロな政治の変化

第二章 「価値観変化」の検討 — 一九八〇年代前半 —

第一節 「安全なき環境における脱物質主義」

第二節 「二つの基本仮説」と「三つの効果」

第三章 マクロレベルへの展開 — 一九八〇年代後半 —

第一節 政治亀裂

第二節 新しい政党

第三節 政党システム

おわりに

文献リスト

付録図表

金丸裕志

はじめに

本稿ではアメリカの政治学者、ロナルド・イングルハートの理論を中心にとりあげる。イングルハートによれば、現代の先進社会における社会経済状況の変化によって人々の価値観が変化し、それによって政治のあり方が変わってくるという。よって、時代ごとの社会経済状況の違いは世代ごとの価値観に反映され、世代ごとの価値観の違いが政治の変動をつくり出すという。

一九七〇年代に「静かなる革命」論が発表されて以降、一九八〇年代前半まで、これに対する理論的反応は、そのミクロレベルでの議論、すなわち、人々の価値観が変化しているという、個人レベルでの変化の部分に集中している。確かに、先進社会の豊かさの増大あるいは脱工業化に伴う政治変動を論じた数多くの研究のなかで、イングルハートの理論の最大の特徴は、これらのマクロな社会レベルでの変化を、個人レベルの価値観変化に還元して論じた点にあった。だが、「静かなる革命」というタイトルに最もよく示されているように、もともと彼自身の問題関心は、「革命」つまり、マクロレベルでの政治ないしは社会の変化にあったのである。

また、イングルハートの理論は、一九八〇年代後半、「ニューポリティクス」の分析枠組みとして用いられるようになる。「ニューポリティクス」とは主にヨーロッパを中心とした、従来のイデオロギー対立の軸にはのらないような環境政党などの新しい政党、ないしは新しい社会運動の出現をいう。「緑の党」が西ドイツ議会に議席を初めて得たのは一九八三年のことであるから、一九八〇年代の中頃からこうした「ニューポリティクス」の研究が始まる。こうした「ニューポリティクス」の現象を先進社会の社会経済状況という文脈のなかに位置づけ、その発生とその特性を明らかにしようとするさいに、重要な分析枠組みとして用いられたのがイングルハートの理論枠組みであった。

ただし、彼の一九七〇年代の理論枠組みをこうした「ニューポリティクス」の分析枠組みとして適用するのには、それを二つの方向で展開させる必要があったといえる。一つは、それまで個人レベルに偏重しがちであった議論をマクロレベルでの政治変動に適用する方向で展開すること。もう一つは、そもそも「静かなる革命」論が一九六〇年代終わりから一九七〇年代はじめにかけて頻発した社会運動を念頭に置いたものであったが、これを政党という制度レベルの議論へと展開する必要があったのである。

従って、イングルハートのそもその問題関心という意味で、また、「ニューポリティクス」の分析枠組みとしての彼の理論の適用という意味でも、八〇年代前半までのミクロレベルに重心をおいた議論から八〇年代後半のマクロレベルに重心をおいた議論へと、彼の理論が展開を遂げていったことは、たいへん重要である。

ところが、こうしたイングルハート理論のマクロレベルへの新たな展開は、従来、看過されがちであったように思われる。つまり、彼の理論がとりあげられる場合、これまではそのミクロレベルでの価値観変化の側面が主にとりあげられてきたのである。本稿は、一九七〇年代から八〇年代にかけてのイングルハートの理論史を概観することを目的としている。だが、そのさいとくに、八〇年代後半以降のマクロレベルでの理論に力点を置きながら、それまでのイングルハートの議論が、マクロレベル・制度レベルの議論へと展開していくプロセスを描き出してみたいと思う。

第一章 「静かなる革命」の基本図式 —一九七〇年代—

イングルハートは「静かなる革命」によってとみに有名である。「静かなる革命」論によって彼は、社会経済状況の変化が政治社会を構成する個人に及ぼす影響を及ぼし、こうした個々人の政治意識内部の変化が政治社会全体のようにいかなる影響を及ぼすのかを明らかにしようとした。ここで、社会経済状況の変化とは、工業社会から脱

工業社会への変化といつてよいだろう。⁽¹⁾ こうした脱工業社会への社会状況の変化が政治にいかなる影響を及ぼすかという研究も、決して少なくない。⁽²⁾ その中であつて、イングルハートの研究は、脱工業社会において、個人の政治意識が、「脱物質主義」に変化している、と主張した。こうした個人レベルにおける政治意識の変化は、政治社会レベルにおいては、いわば「左翼的」ないしは「革新的」な方向へと変化することを示しており、それが、まさに、左翼的な社会運動の噴出した一九六〇年代の終わりから一九七〇年代はじめにかけての社会状況に当てはまるものであつたがゆえに、イングルハートの「静かなる革命」論は、説得力をもっていた。「静かなる革命」において、「革命」という言葉は、こうした左翼化・革新化という変化の方向を含むニュアンスをもち、そうした変化が、個人の政治意識レベルで生じているという意味で、「静か」なのである。

イングルハートの「静かなる革命」論は、一九七一年のアメリカ政治学会誌に発表された論文「ヨーロッパにおける静かなる革命—脱工業社会における世代間変化—」⁽³⁾（以下、七一年論文とよぶ）に始まる。その後、この論文に対するリアクションをもまとめたかたちで一九七七年に、単行本として『静かなる革命—西洋社会における価値観変化と政治スタイル—』⁽⁴⁾（邦題『静かなる革命—政治意識と行動様式の変化—』、以下『静かなる革命』とよぶ）が出版された。本章では、これら二つの作品を中心として、一九七〇年代における「静かなる革命」の基本図式を検討していくことにする。

七一年論文、および『静かなる革命』における理論図式は、後のイングルハートの理論の基本形をなしている。七一年論文で提示された理論図式は、より洗練されたかたちで『静かなる革命』で提示されているが、それは〈図・1〉のような図式でまとめられている。ここで提示される「静かなる革命」のプロセスは、社会経済状況の変化から価値観の変化、そしてマクロな政治の変化へといたる、三つの段階からなっている。〈図・1〉においては、はじめの「システムレベルの変化」が社会経済状況の変化に、「個人レベルの変化」が価値観の変化に、そして「システムレベル

での結果」がマクロな政治の変化に対応している。

このプロセスを、《社会経済状況が変わると、個々人の価値観が変わる。個々人の価値観が変わると、マクロな政治のありようが変わる。》と要約することができよう。ここで、前半の《社会経済状況が変わると、個々人の価値観が変わる》というプロセスを価値観変化のプロセスと呼ぶことにする。これは、マクロレベルからミクロレベルへ向かつての変化、イングルハートの図式でいうならば、「システムレベル」から「個人レベル」へ向かつての変化である。これに対して、後半の《個々人の価値観が変わると、マクロな政治のありようが変わる》というプロセスをマクロな政治変動のプロセスと呼ぶことにする。これは、ミクロレベルからマクロレベルへ向かつての変化、イングルハートの図式でいうならば、「個人レベル」から「システムレベル」へ向かつての変化である。本章では、価値観変化のプロセスを第一節で、マクロな政治変動のプロセスを第二節でとりあげることにする。

第一節 価値観変化

価値観変化のプロセスは《社会経済状況が変わると、個々人の価値観が変わる》というものである。これから三つの問題がでてくる。つまり、第一に、社会経済状況の変化とはどのようなものかという問題。第二に、個々人の価値観はどのように変化しているかという問題。そして第三に、社会経済状況の変化と価値観変化との間の関係はどのようなになっているのかという問題、である。

まず第一の問題、つまり社会経済状況の変化とはどのようなものかという問題についてみてみよう。『静かなる革命』のなかで、イングルハートは社会経済状況の変化として、まず次の六点を指摘している。⁽⁵⁾すなわち、①技術革新、②職業構造の変化、③経済成長、④教育の普及、⑤マスコミの発展、⑥年齢層の経験の違い、である。また、こうした社会経済状況の変化を数量的にあらわす場合に、変数として用いているのは、所得水準やGNP、経済成長率

といった経済的豊かさの指標、あるいは教育水準や職業構成などの指標である。このように、イングルハートのいう社会経済状況の変化とは、経済的な豊かさの増大を中心としながらも、それに限らず、教育水準の上昇や職業構成の変化などの広範な社会的変化を指していることから、脱工業社会への変化であるといつてよい。

またイングルハートは、これらの社会経済的指標に加えて、「次の二つの現象がとりわけ重要であろう」といつてゐる。それは、①戦後、未曾有の繁栄を経験したこと（経済的繁栄）と②全体戦争がなかったこと（身体的・政治的安全）である。脱工業社会において、人々が経済的繁栄と身体（政治）的安全のなかにあつたことが、彼らの価値観に大きく影響を与えていると彼はいうのである。

次に第二の、個々人の価値観はどのように変化しているかという問題についてみてみよう。

まず、イングルハートは、『静かなる革命』の冒頭でこういつてゐる。「欧米諸国民の価値観は、物質上の福祉と身体（8）の安全に対する要望から、徐々に生活の質を重視する方向に移りつつある」。つまり、彼によれば、個々人の価値観は社会経済状況の変化に伴つて、「物質主義的価値」から「脱物質主義的価値」へと変化してきているといふのである。⁽⁹⁾

ここにいう「物質主義的価値」とは「物質上の福祉と身体（10）の安全に対する」欲求に対応するものであり、「脱物質主義的価値」とは「生活の質」にたいする欲求に対応するものである。ここで、イングルハートの実証の手法が数量分析的なものであるから、これらの価値観類型は操作化される必要がある、その操作化の中で、これらの価値観は定義されているといえる。イングルハートは人々の価値観を調査するにあたって次のような「四項目指標」を用いてゐる。

〈四項目指標⁽¹⁰⁾〉

①国内秩序の維持 ↓身体（11）の安全

②重要な政治決定に際して発言権を増すこと ↓政治参加

③物価上昇との戦い ↓経済の安定

④言論の自由の保護 ↓言論の自由

これらの項目のうち、重要と思われるものを二つ選ばせるわけだが、ここで、イングルハートは①と③を「物質主義的価値」の項目、②と④を「脱物質主義的価値」の項目として設定している。従って、このなかから二つを選択する際に、①と③を選択すれば、その被調査者は「物質主義型」、②と④を選択すれば、「脱物質主義型」と定義される。そして、そのほかの組み合わせ、つまり、①と②、①と④、②と③、③と④を選択した人は「混合型」と定義される。

これらの項目を用いて、イングルハートは、いかなる社会において、いかなる年齢層において、いかなる時代に、「物質主義」と「脱物質主義」がどのように分布するかを調べている。そして、脱工業社会におけるほど、つまり、経済水準が高く、教育水準が高く、マスメディアが発達しているような社会におけるほど、「脱物質主義」の割合が増え、また、若年層におけるほど「脱物質主義」の割合が多くなっていることをつきとめたのである。

最後に第三の社会経済状況の変化と価値観変化との間の関係の問題を検討する。ここでは、イングルハートの仮説における「価値観変化」の論理を検討することで、後のイングルハートの検証がいかなる因果関係を説明しているかを示しておきたい。⁽¹¹⁾

従来、イングルハートの理論には三つの理論的背景があるといわれてきた。⁽¹²⁾つまり、①欲求階層論と②脱工業社会論、③政治世代論である。このうち、②脱工業社会論は、社会経済状況の変化としてすでにみた。

そこでまず、①欲求階層論についてみると、これは、イングルハート理論の根幹をなす重要な理論であるといえる。⁽¹³⁾イングルハート自身がいつているように、この欲求階層論はエイブラハム・マズローの理論を採用している。⁽¹⁴⁾マ

ズローによれば、人間の欲求には五つの基本カテゴリーがあつて、これらは階層をなしており、各々の欲求が充足されるに従つて、順に段階を追つて上昇していくという。イングルハートはこの理論を応用して、社会が豊かになると生理的欲求や安全欲求が満たされ、所属欲求や自己実現欲求が表面に現われてくる。ゆえに、脱工業社会における価値観は、こうした高次元の欲求を反映したものとなるだろう、というのである。これがイングルハートのいう「脱物質主義的価値」なのである。

次に、③政治世代論は、価値優先順位が人格形成期の頃にほぼ形成され、それが成年期を通じて継続されることから、ある人が人格形成期にどのような影響を受けたか、言い換えるならばどのような社会環境にあつたかがその個人の価値優先順位に大きくかわつて¹⁷いる、という仮説に依拠している。つまり、マクロ的にいえば、ある世代はその人格形成期にあたる時期に共通の社会経済的環境があるので、その世代には共通した価値優先順位をもつ傾向があるということである。

これら「欲求階層論」と「政治世代論」が、イングルハートの価値観変化仮説の論理を組み立てているといえる。つまり、人の価値観は、その人格形成期にほぼ形成され、その価値観が青年期を通じて継続されるが、人格形成期に経済的安全や身体的安全のない貧困な社会にいと、経済的豊かさや安全を優先する価値観を形成し、逆に、豊かな脱工業社会にいと、帰属や自己実現を優先する価値観を形成する。貧しい社会で人格形成期を過ごした世代は、物質主義的価値をもつ傾向があり、豊かな脱工業社会で過ごした世代は、脱物質主義的価値をもつ傾向があるという。このように世代ごとの価値観が違ふために、時代が経つにつれて、社会全体の価値観の分布が変わつてくるといふわけである。

第二節 マクロな政治の変化

価値観変化のプロセスと同様、マクロな政治変動のプロセスからも三つの問題がでてくる。第一に、個々人の価値観はどのように変化しているかという問題。第二に、マクロな政治のあり方はどう変わっているのかという問題。そして第三に、価値観変化とマクロな政治変動との関係はどのようにになっているのかという問題、である。ただし、第一の問題に関しては前節ですでに検討している。そこでまず、第二の、マクロな政治のあり方はどう変わっているのかという問題について述べることにする。

マクロな政治の変化に関して、イングルハートは、政治的争点、政治の社会的基盤の変化、国家機構に対する支持、政治参加のスタイル、の四点を指摘している。⁽¹⁸⁾

まず、イングルハートは政治的争点の変化を「工業社会の階層性を反映した争点の重要性が低下し、イデオロギー、民族性、生活様式等がしだいに重要性を帯びてくる」、と説明している。⁽¹⁹⁾ 脱工業社会における争点としては、環境保護・生活の質・女性の役割・道徳の再定義・麻薬の使用・広範な国民の参加といったものがあげられている。

次に、政治の社会的基盤の変化とは、階級投票の後退にみられるものである。つまり、従来、中産階級は現状維持的な保守政党に投票する傾向が大きく、労働者階級は左翼政党に投票する傾向が大きかったが、脱工業社会においては、「左翼政党への新しい支持はいよいよ中産階級から補充されるのに対して、現状維持政党はますますブルジョア化した労働者階級から支持を得ることになる⁽²⁰⁾」とされる。

第三の国家機構に対する支持とは、社会が豊かになるにしたがって、民衆の国家機構に対する支持、あるいは政府に対する支持が衰退するだろうというものである。これにより、将来、国際的統合に対する開かれた態度が顕著になるだろうし、同時に、国家内下位集団つまり民族（エスニシティ）や地方主義が強調されるようになるだろうという。

最後の政治参加のスタイルとは、脱工業社会における価値観の変化に従って、政治参加の様式が「エリート指導的」政治参加から「エリート挑戦的」に変化するというものである。時代背景から考えても、「静かなる革命」論が、その当時頻発した学生運動や社会運動を念頭に置いていることは間違いない。ただし、イングルハートが強調しているように、「劇的な、またはセンセーショナルな」諸事件（＝革命）は、「一九七三年ごろには終わっていた」が、「欧米世界の全体を通じて国民の政治的役割に関して、徐々にではあるが根本的な変化が起きている」⁽²¹⁾のであり、この「徐々にではあるが根本的な変化」こそが「静かなる革命」なのである。

総じて、ここでイングルハートが論じているマクロなレベルでの変化とは、政治社会の変化であることがわかる。もつとも、こうした政治社会レベルでの変化が、社会運動や投票行動などを通じて、政治過程、政治体制に与える影響をもイングルハートは考慮している。というよりも、「革命」と題したからには、彼はここで政治体制レベルでの変化をも暗示していたといえる。ところが、こうした変化の伝達の流れはその間に様々な諸力が働いたため、このプロセスが最後まで至らないことや、変化の方向性が変わってしまうことも少なくない。⁽²²⁾従って、投票意図の変化が、即座に政治のマクロな変動、とりわけ、政党や政党システムというような制度的な部分に影響してくると結論することはできない。実際、本稿の第三章でみるように、「価値観変化」がマクロレベルの政治現象として現れてくるのは、一九八〇年代に入ってからのことなのである。

とはいえ、こうした政治社会レベルでの変化が、構造的なものとして現れ、政治過程ないし政治体制レベルでの変化に影響を与えるものとして考えられるのが、「政治亀裂 political cleavage」の変化であろう。というのも、リップセツトとロツカンの業績によってよく知られるように、「政治亀裂」は政党や政党システムに影響を与えるからである。⁽²⁴⁾そしてイングルハートも、『静かなる革命』の第三部を「政治亀裂」の議論に当てている。

まず、イングルハートは工業社会における政治亀裂について論じている。⁽²⁵⁾ここでまず重要になってくるのは、左翼

と右翼をどう区別するか、という問題である。⁽²⁶⁾ というのも、価値観変数に対してマクロな政治変動を表わす変数を設定するさいに、右翼—左翼次元が用いられるからである。政党単位で変数をとれば、国ごとの比較のさいに不都合となる。なぜなら二大政党制から、数多くの政党を含んだ多党制まで、政党の数そのものがまちまちだからである。そこでイングルハートは右翼—左翼という次元で二分する。このような右翼—左翼二分法も客観的にどう区別するかとなるとやはり国ごとで異なってくるため、これはあくまで「選挙民がある政党をどう認識するか」にまかせることにする。⁽²⁷⁾ このようにマクロな政治の変容を表す変数としての右翼—左翼次元が設定されるのである。

数々の研究によって明らかにされているように、工業社会においては中産階級や上層階級は保守的な右翼政党を支持する傾向があったのに対し、労働者階級は左翼政党を支持する傾向があった。⁽²⁸⁾ つまり、政党支持を通してても、工業社会における政治亀裂は、社会階級に基づいている。

ところが、イングルハートは、脱工業社会においては、こうした社会階級に基づく社会亀裂が変化してきているという。⁽²⁹⁾ 彼の分析によれば、「おそらくイギリスを除いて、この章で扱った八か国すべてで、階級亀裂は後退している」。⁽³⁰⁾ そして彼は、「脱工業的亀裂の性格は、(明らかな理由によって)これほどはつきり理解されていない。しかし予測としては、脱工業社会の政治は、今後ますます所属的な亀裂もしくは社会階級に基づいた亀裂によってではなく、個人の生活様式の選好および価値観によって動機づけられることになるのではあるまいか」⁽³¹⁾ という仮説をたてている。

イングルハートはさらに、工業社会から脱工業社会へのこうした政治亀裂の変遷を、前工業社会の政治亀裂も考慮に入れて考察する。⁽³²⁾ 歴史的にみれば、前工業社会から工業社会、工業社会から脱工業社会へと推移するので、当然、政治亀裂も前工業的亀裂—工業的亀裂—脱工業的亀裂という変化を見せる。とはいえ、イングルハートによれば、前段階での亀裂は全く後のものにとって代わるとは限らず、とくに宗教や地域、言語といった「前工業的な亀裂は工業

的な政治亀裂よりもずっと頑固⁽³³⁾に残存するという。例えば、彼は、ベルギーの事例をあげているが、そこでの地域・言語的亀裂を分析して「ベルギーにおける種族的ナショナリズムは・・・（中略）・・・新しい型の共同体主義である。たぶん、それはますます脱物質主義的な性格を帯びつつある⁽³⁴⁾（強調は金丸）」と結論している。

このように、脱工業社会の政治亀裂が、前工業社会の政治亀裂に類似してくる傾向を、イングルハートは、脱物質主義者の何かある絶対的なものに対する探求が、経済的・科学的合理性の価値の引き下げと相まって、前工業的パターンとのある種の類似を示しているのだと説明している⁽³⁵⁾。

さて次に、価値観変化とマクロな政治変動との間の関係についてみる。これらの関係はこれまでの政治亀裂の議論においてほとんど明らかになってきている。つまり、物質主義から脱物質主義への価値観の変化に伴って、政治亀裂は工業社会の社会階級的亀裂から脱工業社会の政治亀裂に変化してきており、さらにこの脱工業社会の亀裂は前工業社会の政治亀裂に類似しているため、前工業社会的亀裂も相対的に重要になってきている、ということである。

『静かなる革命』第九章では、これらの関係の数量的実証を、社会背景的変数をも操作化しながら、行っている。そして、「価値観のインパクトは構造的・戦術的拘束によって媒介される。しかし、これらの拘束のなかで、価値優先順位の変化は、しだいに高度工業社会における政治対立の社会的基盤を再形成しつつあるようである⁽³⁶⁾」という結論にいたっている。

ここで興味あるのは、「脱物質主義者が左翼に投票するのは、単に彼らが若いだけなのか、あるいは価値観そのものが投票に影響を及ぼしているのか⁽³⁷⁾」という問題に関する分析である。この問題は、価値観変化が世代観の違いによって生じているのか、それとも年齢（ライフサイクル）の違いによって生じているのかという問題として、のちのイングルハートの理論的展開のなかでもたいへん重要な位置を占めてくる。イングルハートが「静かなる革命」論を一九七一年にはじめて提出したのち、これへの批判としてまず、イケがこの問題を提出し、続いてダールトンが同

様の批判を行っている。⁽³⁹⁾つまり、彼らは、価値観変化が単に年齢の違いによって生じているため、若年層も年齢を重ねるごとに物質主義的になっていき、社会全体の価値観分布としての変化は生じないのではないかという疑問を提出したのである。彼らの議論によれば、「静かなる革命」は起きない、ということになる。

価値観変化が年齢ではなく価値観そのものの変化によって生じているという分析は多変量解析によって可能となる。そして、イングルハートは、「多変量解析の結果は、年齢よりもむしろ価値観の型それ自体が、重要な影響力であることを示唆する⁽⁴⁰⁾」という結論を得ている。

ここまで、『静かなる革命』における、マクロレベルでの政治変動の議論についてみてきた。イングルハートはマクロな政治変動の「脱物質主義的現象」として、『静かなる革命』第十章で、アメリカにおける一九七二年選挙、西ドイツの学生運動、フランスの五月反乱といった諸事例をとりあげている。これらの事例を見れば、これらが主に社会運動などの社会レベル・非制度レベルでの現象であることがわかる。こうした諸現象は、どの程度、体制レベル・制度レベルでの変化につながるのか。また、脱物質主義者は、その特性上、組織化あるいは制度的手段に訴えることを好まない⁽⁴¹⁾。こうした組織化・制度化を好まない脱物質主義的現象は、どの程度、政治過程・政治体制レベルに転化していくことができるのであろうか。また仮に、価値観変化が投票行動を通じて政治過程に反映されるとしても、政治過程内での諸要因がその正確な反映を妨げるであろう。このような障害を越えて、価値観変化はどのくらい、マクロな政治の状況に変化を与えることができるのであろうか。

このように、七〇年代『静かなる革命』における、マクロレベルの政治変動に関する議論は、あくまでも、社会運動のような社会レベル・非制度レベルでの諸現象を説明したにすぎなかった。こうした、社会・非制度レベルの諸現象が、果たして体制レベル・制度レベルの変動につながっていくのか。それはこの時点ではわからないばかりか、問

われることもない。この疑問については、マクロな、制度的レベルでの政治変動が実際に生じる、一九八〇年代の後半になって解答が試みられ始める。こうした試みは、本稿の第三章で検討する。

(1) Bell (1973).

(2) 例えば Lipset (1959), Huntington (1974), Goldthorp et al. (1968).

(3) Inglehart (1971).

(4) Inglehart (1977). 以下、この著書に関して、註においては原書と訳書の両方の箇所を明記することにする。

(5) Inglehart (1977), pp.6-11. 邦訳七―一二頁。

(6) また、これら経済水準と教育水準、職業構造などが互いに関連しあっていることも注意しておくべきだろう。例えば、イングルハートは教育水準という指標の表す意味として次の三点を挙げている (Inglehart (1977), ch.3. 邦訳第三章 'Inglehart (1979b)').

① 豊かさの指標としての教育

② 認知能力の発展の指標としての教育

③ 特定のコミュニケーション網への統合の指標としての教育

これを見てもわかるように、教育水準という指標は確かに「認知能力の発展の指標として」、あるいは「特定のコミュニケーション網への統合の指標として」捉えることもできるが、「豊かさの指標として」捉えることもできる。つまり、教育水準は、豊かさ（経済水準）と大きく相関しているのである。この相関に関する数量的な実証は、Inglehart (1977), Fig. 3-2. 邦訳図 3-1 のパス解析にあらわされている。

(7) Inglehart (1977), p.21. 邦訳二四頁。

(8) Inglehart (1977), p.4. 邦訳三頁。

(9) Inglehart (1971), p.993. また、七一年論文において、「物質主義」「脱物質主義」はそれぞれ、「獲得型」「ポストブルジョワ」と呼ばれていた。A・マージスはイギリスにおける満足度調査から、「ポストブルジョワ」が帰属や知識、理念などにたいして満足度が低いのみならず、物や安全に対しても満足度が低いことを見出して、「イギリスのポストブルジョワは実際、獲得型よりもより獲得的である」(Marsh (1975), p.26) と指摘している。その後、「静かなる革命」からこれらの呼称を変更している。その

後の議論においては全面的に「物質主義」「脱物質主義」が用いられていることから、本稿では原則として「物質主義」「脱物質主義」を用いることにする。

(10) Inglehart (1977), p.30. 邦訳三〇頁。

(11) イングルハートの検証方法は二変数間の相関の大きさを求めるものである。ところが相関関係は因果関係ではないから、相関の大きさは単なる「偶然の一致 (coincidence)」でもあり得る。そこで、相関を検証する場合においては、二変数間の因果関係は、仮説のなかに担保されることになる。

(12) Inglehart (1977). 邦訳：訳者あとがき（三宅一郎）、村山（一九九一）四三五頁。

(13) Inglehart (1971), p.991, Inglehart (1977), p.22. 邦訳二四一五頁。

(14) Maslow (1954).

(15) Maslow (1954). 邦訳五六一七二頁。

(16) 下位の欲求から順に、「生理的欲求」「安全の欲求」「所属と愛情の欲求」「自己尊敬の欲求」「自己実現の欲求」。

(17) Butler/Stokes eds. (1969), Ch.3.

(18) Inglehart (1977), pp.12-7. 邦訳一三一九頁。

(19) Inglehart (1977), p.13. 邦訳一四頁。

(20) Inglehart (1977), p.14. 邦訳一五頁。

(21) Inglehart (1977), p.17. 邦訳一八一九頁。

(22) どのような諸力がどのように投票行動ないしは選挙結果に影響するかについてはもちろん数多くの研究がある。これら諸研究のレビューとしては三宅（一九八九）や蒲島（一九八八）が役立つ。

(23) イングルハート自身、次のようにいっている。「もちろん、脱物質主義者が単に自分自身を左翼に属していると考え、傾向があるからといって、必ずしも彼らが実際に左翼政党に投票するとはかぎらない。この二つの命題をつなぐには、他の多くの要因が必要である。」(Inglehart (1977), p.70. 邦訳六八頁)。これは「静かなる革命」における投票意図（政治意識）と投票行動との断絶に関して留保した一文である。さらにマクロなレベルの議論、例えば、政党や政党システムといったような議論をする場合にはこのような留保がさらに重要となるだろう。

(24) Lipset/Rokkan (1967).

(25) Inglehart (1977), Ch.7. 邦訳第七章。

- (26) Inglehart (1977), Ch.7.2. 邦訳第七章¹⁾。また Inglehart/Klingemann (1976) も参照。
- (27) Inglehart (1977), p.187. 邦訳一八三頁。
- (28) その最も代表的なものとして Lipset (1959) がある。また Alford (1963) も同様の結論を導いているといえる。
- (29) もちろん、脱工業社会においては、社会階級投票の衰退は、イングルハートのほかにも、数多くの研究者によって確認されている²⁾。
- (30) Inglehart (1977), p.215. 邦訳二〇六頁。
- (31) Inglehart (1977), p.182. 邦訳一七八頁。
- (32) Inglehart (1977), Ch.8. 邦訳第八章。
- (33) Inglehart (1977), p.217. 邦訳二〇九頁。また Huntington (1974) も参照。
- (34) Inglehart (1977), p.238. 邦訳二二九頁。
- (35) Inglehart (1977), p.242. 邦訳二三四頁。例えば、脱工業社会におけるマクロな政治の変化の一つとして、イングルハートが挙げた「国家機構に対する支持」の変化をみるとよい。もちろん、こうした変化は、脱物質主義的価値に基づくものであるが、国家の否定は、一方でコスモポリタニズムにつながると同時に、他方で地域主義にも結びつくことになる。
- (36) Inglehart (1977), p.261. 邦訳二五四頁。
- (37) Inglehart (1977), p.253. 邦訳二四六頁。
- (38) Ike (1973).
- (39) Dalton (1977).
- (40) Inglehart (1977), p.253. 邦訳二四六頁。
- (41) 後に脱物質主義政党的代表として西ドイツの緑の党がでてくるが、これも政党というかたちをとっているものの、発足当初は「反政党的政党」を強調していた。それゆえに日本語で「緑の党」といっているが、ドイツ語では「緑の人々」(die Grünen)とふまうに「党」を名乗っていない。

第二章 「価値観変化」の検討 ―一九八〇年代前半―

一九八〇年代にはいると「今や私たちは一〇年分のデータを手に入れ」、イングルハート独自の調査項目による長期間の時系列データが使用可能となった。また、データの蓄積という意味では、同一のデータ指標で比較可能な国の数も増えている。⁽²⁾ こうした調査データの蓄積は、とくに「価値観変化」の理論を精緻化するのに役立つこともあって、この時期、一九八〇年代の前半には「価値観変化」に関する議論が盛んに提起されるようになった。

さて、一九七〇年代を通してみれば、「静かなる革命」は決して単線的ではなかった。先進諸国においてはこの七〇年代に、オイルショックに始まる不況や、冷戦下での核戦争あるいは頻発する地域紛争の恐怖など、経済的安全と政治的安全の喪失を経験するのである。⁽³⁾ こうした七〇年代の社会経済状況の変化によって、経済的安全と政治的安全を前提とする「静かなる革命」の理論は変更を迫られることになる。

第一節 「安全なき環境における脱物質主義」

「価値観変化」を中心とした八〇年代前半におけるイングルハートの議論のなかできわめて重要なのが、彼が一九八一年にアメリカ政治学会誌に発表した論文「安全なき環境における脱物質主義」（以下、八一年論文とよぶ）である。この論文のタイトルにある「安全なき環境」とは経済的安全と政治的安全の喪失を意味している。つまりこの論文は、一九七〇年代における石油危機に代表される経済的安全の喪失と、核戦争の脅威に代表される政治的安全の喪失という新たな社会状況が、価値観変化に与える影響を、一九七〇年代の一〇年間にわたって蓄積された通時的データを活用しながら検討したものである。まずはこの論文の内容から検討していくことにする。

八一年論文は、価値観変化の理論を再構成しているという点で重要である。この八一年論文における価値観変化の理論をみていくと、まず従来の価値観変化理論を、「欠乏仮説」と「社会化仮説」という二つの基本仮説から再構成している点に最大の特徴が見いだされる。そして次に、データを解析していくなかで、イングルハートが当初から強調していた「世代効果」による価値観変化の説明に、「時代効果」と「加齢（ライフサイクル）効果」⁽⁴⁾を付け加えて、これら三つの効果による変化として、価値観変化を説明しているという特徴がある。

二つの基本仮説

まず「欠乏仮説」と「社会化仮説」は、一九七〇年代の『静かなる革命』のなかでも、価値観変化の説明として用いられていたものである。⁽⁵⁾だがここで重要なのは、イングルハートがこれら二つの前提仮説を明確に定義することで、価値観変化のメカニズムをより明らかにし、これらが独立して機能するものとして、価値観変化仮説を再構成したことである。八一年論文で用いられているデータは、まさにこれら二つの、独立した前提仮説の組み合わせによって理解されるのである。

八一年論文でイングルハートはこれら「二つの仮説」を次のように説明している。まず、欠乏仮説とは、「個人の価値優先順位にはその人の社会経済的環境が反映しており、その結果、相対的に不足しているものに主観的に大きな価値をおく」⁽⁶⁾という仮説である。⁽⁷⁾そして、社会化仮説とは、「人の基本的な価値観は、その成人前の期間に広く行き渡っていた状況をおおむね反映している」⁽⁸⁾という仮説である。⁽⁹⁾政治的社会的にかんしては、イングルハート以前にくつもの研究がある。例えば、価値観変化の理論にかんしては、R・ダールトンが価値観が形成される年齢について調べており、価値観は一〇歳前後に形成されるとしている。⁽¹⁰⁾この政治的社会的の時期における、あるいは人格形成期における社会経済的環境⁽¹¹⁾によって価値観がほぼ決定され、それが後の人生を通じて保持されるというのが社会化仮説

である。

一九七〇年代の「静かなる革命」論における価値観変化の議論では、欠乏仮説は社会化仮説と不可分に結びつけられて論じられていた。つまり、価値観決定のメカニズムとしての欠乏仮説は、社会化の時期に限りて用いられていたのである。したがって、人間の価値観は、社会化の時期あるいは人格形成期にそのほとんどが形成され、それがその後の人生にわたって持続するという決定論的な性格をもっていたのである。

ところが、八〇年代の議論でイングルハートがこの二つの仮説を再定義したのは、これら二つの仮説が、それぞれ独立して作用することを強調したからに他ならない。つまり、社会化の時期あるいは人格形成期における価値観の形成は、必ずしも決定論的ではなく、社会化の時期以降においても短期的な時代状況の変化によってかなりの部分、価値観は変化するものであることを、彼は強調するようになったのである。

こうして、社会化仮説と結びついた世代間での価値観変化に加えて、欠乏仮説と結びついた時代状況による価値観変化が説明される。このように、価値観変化は、単なる世代間変化のみならず、時代状況による変化としても現れてくるのである。つぎに、こうした価値観変化の世代効果・時代効果・加齢効果にかんする論点をみてみたい。

三つの効果による価値観変化

イングルハートは八一年論文で、価値観変化が①加齢効果 (aging effects)、②世代効果 (cohort effects)、③時代効果 (period effects) とする三つの効果とそれらの組み合わせによって生じていることを明言している。⁽¹²⁾ 加齢効果による変化とは、個人の価値観が若い頃には脱物質主義である割合が多く、年齢を経るにしたがって、それが物質主義になっていくという変化をいう。よって、社会全体でみれば、世代の入れ替えによっても、物質主義と脱物質主義の割合に変化は生じないということになる。次に、世代効果による変化とは、新しい世代ほど脱物質主義の

割合が多いため、社会全体で見れば、世代の入れ替えによって、しだいに脱物質主義の割合が増えていくという変化をいう。最後に時代効果による変化とは、時代状況の変化による短期的な価値観の変化のことで、例えば七〇年代のように、一時的に経済状況が悪化したときには、物質主義の割合が短期的に増大するという変化がもたらされる。

従来のイングルハートの議論は、価値観変化が世代効果のみによって生じていることを強調していた。例えば、一九七一年論文では、西ドイツのEMNID調査という長期間にわたる意識調査データを援用してライフサイクル（加齢）効果を否定しようとした。⁽¹³⁾だが八〇年代ではイングルハートは世代間変化に加えて、時代効果と加齢効果の存在をも認めているのである。

こうした三つの効果による変化の存在は〈図・2〉⁽¹⁴⁾から見いだされる。まずこの図から最もよくわかるのは、一五・二四歳の集団における、脱物質主義の割合が、時代を追って低下してきていることである。（とはいえ、ほかの年齢層にくらべると依然最も高い割合であることに注意したい。）これに対して、ほかの年齢層ではそれほど顕著ではないものの、脱物質主義が増えてきている。一九七〇年から七三年にかけて、一五・二四歳の集団は、ほかの集団とかけはなれて脱物質主義の割合が大きく、従って、戦後世代と戦前世代との間に価値観の「分水嶺」があるといわれてきた。⁽¹⁵⁾だが七〇年代後半にかけてはそれがみられない。この現象をイングルハートはどう理解しているのだろうか。

まさにここで、「欠乏仮説」と「社会化仮説」が意味をなしてくる。イングルハートは次のように説明する。「欠乏仮説が暗示しているように」明らかに近年の時代効果（経済的・政治的安定の喪失・金丸）が脱物質主義の外観のびていくのを阻んでいるに違いない。そして社会化仮説によつては次のことが暗示される。つまり、近年の諸状況は最も若い、そして理論的に順応しやすい回答者たち、すなわち一五・二四歳のまだ人格形成期にある人たちにもっとも大きなインパクトを与えるだろう、ということである。⁽¹⁶⁾ここで、若年層における時代状況の影響は、欠乏仮説

と社会化仮説との組み合わせで説明されることから、従来の説明とかわりはない。重要なのは、そのほかの年齢層も時代状況による影響を被っており、その意味で、欠乏仮説は社会化仮説から独立して用いられている、ということなのである。

以上のことから明らかなように、八一年論文ではとくに欠乏仮説を社会化仮説から独立した価値観変化のメカニズムとしてとらえることで、まず変化の時代効果の役割が強調されている。それでは次に、変化の加齢効果と世代効果についてはどうであろうか。ここでは、データから直接に、加齢効果による変化と世代効果による変化のいずれが大きいのかは判断できない。ただし、加齢効果による変化だけが生じているのであれば、社会全体の物質主義と脱物質主義との割合に変化はないので、これに時代効果による変化が加われば、この時期、全体として物質主義が増加することになるはずである。ところが実際、データからは必ずしも、物質主義の増加は見いだされない。よって、時代効果による物質主義の増大を相殺するように、世代効果による脱物質主義の増大が生じているという論理をもって、イングルハートは世代効果による変化の有効性の方を支持しているのである。

もつともこれによって、加齢効果の存在は完全に否定されたわけではない。七〇年代のように、世代効果だけによつて価値観変化を説明するのではなく、この八一年論文で、イングルハートが世代効果に加えて、時代効果や加齢効果にも言及していることは注目されるべきであり、その中でもとりわけ、時代効果による変化の存在を発見したことは、彼の理論上の展開としてたいへん重要であるといえよう。

第二節「二つの基本仮説」と「三つの効果」

イングルハートの八一年論文は、それまでの「静かなる革命」の議論のなかでも価値観変化の理論にかんして、より精緻化をめざしたものであった。さらにこの論文はイングルハートの理論史のなかにあつて、一九八〇年代、とり

わけ前半におけるその後の議論を方向付けている。つまり、八一年論文の中心的論点は「二つの基本仮説」と「三つの効果」を確定することにあつたが、これらの論点に対してほかの研究者が批判を加え、これにイングルハートが反論していくなかで、イングルハートの価値観変化の理論はより精緻化されていくのである。以下、イングルハートに対してなされた批判の主だったものとそれに対するイングルハートの反論をとりあげ、それらを概観していくことにしよう。

ベルケンⅡヤゴジンスキーによる批判

八一年論文の後、「二つの基本仮説」および「三つの効果」を中心とした批判が提起されている。まずは、ベルケンとヤゴジンスキーが、二つの仮説についてのイングルハートの七〇年代当初の扱いと、八〇年代の新たな扱いとのアンビバレントさという観点から批判している。⁽¹⁷⁾

ベルケンⅡヤゴジンスキーは、一九七〇年代におけるヨーロッパ六カ国での調査データを検討して、イングルハートが八一年論文でいった社会化仮説と欠乏仮説とは「両義的」なものであると切り出す。つまり、イングルハートのいう社会化仮説と欠乏仮説との関わりは二通りに解釈できるといふわけである。ひとつは、彼らが「コア・モデル」と呼ぶもので、価値観はいったん形成されるとかたちを変えないため、社会全体としての価値観変化は世代間変化といふかたちでしか生じないことになる。これは、社会化仮説を重視した解釈であるといえる。そしてもう一つは、「ソフト・モデル」と呼ぶもので、価値観はそのときそのときの状況によつて変わるため、社会全体としての価値観変化はコーホート（世代）効果ではなく、短期的にも長期的にも、⁽¹⁸⁾時代状況による変化であるといふものである。これはイングルハートのいう欠乏仮説を重視したものである。

ベルケンⅡヤゴジンスキーは次に、イングルハートの用いたものと同じデータを二つの観点から批判的に検討して

いる。まず、彼らはコア・モデルにヨーロッパ六カ国の全体的なデータを当てはめて検討している。その結果、七〇年代、とくに七七八一年にかけては、短期的変動が大きく、コア・モデルにはあてはまらないことがわかる。また、ソフト・モデルでみたときも、高齢コーホートの物質主義の増加率よりも低齢コーホートのそのほうが大きく、価値観変化は純粹に社会化仮説と欠乏仮説の組み合わせであるとは考えられないということがわかる。ここから、ベルケンIIヤゴジンスキーは「私たちの結果から脱物質主義理論——つまりコア・モデルもソフト・モデルも——を確証することはまずできない⁽²⁰⁾」という結論を導いている。

次に、ベルケンIIヤゴジンスキーは西ドイツのデータを分析している。イングルハートの当初の議論からすれば、西ドイツは戦後最も経済成長が著しかった国のひとつであり、また戦前のナチスの恐怖政治を考えれば、戦前世代と戦後世代の価値観の違いは最も大きいだろうということになる。だが、七〇年代の調査結果をコーホートに分けてその推移を検討した彼らの分析結果によれば、新しい世代では物質主義が増加傾向にあり、古い世代では脱物質主義が増加傾向にあり、その間の世代は物質主義も脱物質主義もほとんど変化がないのである。ここで最も新しいコーホートは一九四六年五五年生まれの集団であるから、一九七〇年の調査時点で一五二四歳であつた彼らは、一九八〇年の調査時点で二五三四歳になっている。よつて、最も新しいコーホートにおける物質主義の増加は、彼らが結婚したり、仕事に就いたりしたことによるものであると解釈される。他方、最も古いコーホートは一九一六年以前生まれの集団であるから、一九七〇年には五四歳以上であつた彼らは一九八〇年には六四歳以上になっている。よつて、最も古いコーホートにおける脱物質主義の増加は、彼らがマスメディアの発達などの影響で新しい争点の議論に目を向けはじめたことによるものと解釈される。従つて、一九七〇年から八〇年の間の変化はライフサイクルによる価値観変化の説明が有効であると結論されるわけである⁽²²⁾。

このように、ベルケンIIヤゴジンスキーは、イングルハートの二つの基本仮説の曖昧さを指摘した。この曖昧さが

二つの仮説にたいするイングルハートの七〇年代の説明―世代間変化を強調した―と、新たな解釈―時代効果も含めた―との相違を指摘するものであることはいうまでもない。ところが彼らは、仮に新たな解釈にもとづくにしても、この新たな解釈が、ヨーロッパにおける価値観変化を説明しきれていないことを主張している。この結果、かつてイケがはじめて指摘した、ライフサイクルによる価値観変化が最も有効な説明であるという結論へといたったのである。

イングルハートの反論

ベルケン・ヤゴジンスキーのこの研究に対して、イングルハートは一九八五年の論文「価値観変化の新たな展望」の後半で反論を行っている。⁽²⁴⁾ベルケン・ヤゴジンスキーはイングルハート理論の欠乏仮説と社会化仮説とが両義的であるという問題提起から議論を展開していた。だが、イングルハートのいうこれら二つの仮説は、両義的というよりもむしろ、二つの独立したメカニズムの組み合わせとして理解されるものであった。⁽²⁵⁾

イングルハート自身のいうように、欠乏仮説は価値観変化の短期的変化あるいは時代効果による変化を説明するものだし、社会化仮説は長期的変化あるいは世代効果による変化を説明するものである。このように欠乏仮説と社会化仮説の両方をそれぞれ独立したメカニズムとして認めることは、価値観変化が世代間で生じているのみならず、時代状況による短期的変動でもあることを認めていることに他ならない。イングルハートの価値観変化の理論は当初、その世代間での変化を強調したものであった。ところが七〇年代のデータを分析すると、この時代の価値観変化は世代間での変化であると同時に、短期的な時代状況による変化でもあることが確認されるのである。そして、イングルハートによれば、ライフサイクルによる変化は、依然として、価値観の変化に対してほとんど効果をもたらさないとされているのである。

ヴァン・デットによる批判

ここでライフサイクルによる価値観変化の視点からイングルハートの批判を行ったJ・ヴァン・デットの批判をみておく。⁽²⁶⁾彼は、一九七四年と一九七九年にオランダで行った独自のパネル調査によるデータを分析しているが、その際、価値観変化の理論を三つのレベルに分けて分析している。つまり、社会全体の「全体レベル」での変化と、同一個人のなかでの「個人レベル」での変化、そしてそれらをつなぐ「中間レベル」での変化である。

そこで、ヴァン・デットはまず、「全体レベル」でみれば七四―七九年の間で価値観分布にほとんど変化はなく、あえていうならば、七九年のほうが、やや物質主義よりという意味の「混合型物質主義」がわずかに増えているという結論を得ている。この分析で、オランダ一国とはいえ、彼はイングルハートのいう脱物質主義の増加を反証している。

そして次に、「中間レベル」での検討で、ヴァン・デットは、調査結果をコーホートと年齢層との二通りに分け、価値観が世代に基づくものか、あるいは年齢層に基づくものかを分析している。その結果、物質主義的価値はコーホートに基づくものであり、脱物質主義的価値は年齢層に基づくものであることを見いだした。ここでは特に、脱物質主義的価値が年齢層に基づくものであるという点が重要である。というのも、脱物質主義的価値はある年齢層（若年層）に特有のものであり、決してある世代（新しい世代）に特有のものであるとはいえないことから、脱物質主義的価値は加齢効果によって変化するものであって、イングルハートのいうように、世代効果によって変化するのではないということになるからである。

最後に、個人レベルでみると、彼はパネル調査の強みを生かして、同一個人の回答がどの程度安定しているのかを分析している。そして、イングルハートは政治的関心の有無を不問に付したまま、調査結果を用いて物質主義・脱物質主義を測定している、とイングルハートの調査方法に対して批判を加えている。

このヴァン・デットの批判においては、「イングルハート理論の含意は何らかの全体 (aggregate) レベルにかんするものであるのに、彼のキー仮説は明らかに個人レベルを扱っている」⁽²⁷⁾ といっているように、イングルハート理論の「個人レベル」と「全体レベル」との関連について疑問を投げかけている点に、研究デザイン上の大きな特徴があるといえる。もつとも「個人レベル」と「全体レベル」との関係の問題については、本章の文脈とは直接の関係を持たないため触れないことにした。本稿の文脈上重要なのは、まず、ヴァン・デットがオランダでの調査において脱物質主義の増大を反証したこと、そして次に、彼のいう「中間レベル」での分析において、脱物質主義が年齢層に基づくものであることを見いだしたことであるといえよう。これらはいずれもイングルハートの理論に反証を与えるものである。

イングルハートの反論

こうしたヴァン・デットの批判にたいしてイングルハートは次のように応える。⁽²⁸⁾ 「ヴァン・デットの解釈は…… (中略) …… 不適切な理論上の仮定と不十分なデータベース—深刻にもこれらはいずれも彼の結論を曲げてしまうものである—を反映している」⁽²⁹⁾。ここで「不適切な理論上の仮定」というのは、何らかの時代効果があれば、つまり純粹に世代間変化でなければイングルハートの理論は誤りだとすることである。すでにイングルハートが八一年論文で強調していたように、七〇年代の変化を検討するさいにとくに重要なのは、この時期の価値観変化は時代効果によつて引き起こされているということであり、その時代効果を説明するために、イングルハートは欠乏仮説と社会化仮説を、各々独立した作用として再定義したのである。⁽³⁰⁾

また、ヴァン・デットのデータベースの量的な不十分さという点も指摘している。⁽³¹⁾ 彼はヴァン・デットのデータに代えて、E C委員会主催の調査データを用いて、やはり若いコホートで脱物質主義が多く、しかもそれは八〇年代

に入つて増えてきているということを証明している。⁽³³⁾ また、各々のコーホートにおいて価値観は経済状況（インフレ率を指標とする）と連動しており、連動の仕方は、まだ社会化途上にある若い年齢コーホートほど敏感であるという結果がでてゐる。

最後に、個人レベルでの分析に関して、イングルハートは一九八五年、「大衆の信念体系における全体レベルの安定性と個人レベルの流動性」という論文⁽³⁴⁾で詳細に論じている。そこでは、彼独自のパネル調査データを用いて、個人の解答の安定性や政治関心の問題に反論している。興味あることに、彼は八一年論文ではコーホート分析は行つていなかったが、⁽³⁵⁾この八五年の論文ではコーホート分析を行つており、この分析から世代効果と時代効果の存在を証明している。⁽³⁶⁾ こうして、イングルハートの価値観変化の理論は、二つの基本仮説を基盤とする二つの効果―世代効果と時代効果―を中心に説明され、ライフサイクルによる効果は、完全には否定されないものの、ほとんど見いだされないことが改めて強調されるのである。

これら、ベルケン・ヤゴジンスキーとヴァン・デットの批判はいずれも、価値観変化がライフサイクルによつて生じているのではないかという批判であつた。これらに反論するさいに、イングルハートは、決して、加齢効果による変化を全面的に否定しているというわけではない。ただ、彼は加齢効果による価値観変化はごく小さいものであつて、それ以上に、世代間での変化と、時代背景による短期的な時代変化とが重要であることを、蓄積されたデータの分析をもとに証明しているのである。

こうして、七〇年代に蓄積された時系列データを用い、他の研究者たちの批判に応答していくなかで、八〇年代前半、イングルハートはその価値観変化にかんする議論を精緻化していつてゐる。つまり、彼は価値観変化のメカニズムを「欠乏仮説」と「社会化仮説」という二つの仮説から説明し、これら二つの基本仮説が相互に独立して作用する

ことから、価値観変化は、世代間の違いによって生じるのはもちろん、短期的な時代状況の影響によっても生じるというように、その理論を再構成したのである。

(1) Inglehart (1981), p.880.

(2) Inglehart (1990), Inglehart/Abramson (1994) といった一九九〇年代の諸業績、とくに Inglehart/Abramson (1994) で取り上げられている国の数はおびただしい。また、こうした調査範囲の拡大によって、イングルハートの関心は政治文化論へと向いてきている。Inglehart (1988), Inglehart (1990), Shively (1991) を参照。ただし、本稿では政治文化論についてはとりあげないことにした。というのも、イングルハートの議論のなかで、政治文化論はよく整理されておらず、位置づけが難しいからである。

(3) Inglehart (1981), p.880.

(4) 「加齢効果」と「ライフサイクル効果」という用語がこののちたびたびでてくるが、これらはほぼ同じ意味として考えることにする。

(5) Inglehart (1977), pp.21-4. 邦訳二四頁。本稿の第一章では「静かなる革命」の理論を〈図・1〉に沿って三分割したうえで、そのうちの価値観変化の部分を「三つの理論的背景」を引き合いに出しながら説明した。このとき、三つの理論的背景のうちで、「脱工業社会論」は、社会経済状況を表す独立変数として、この理論の「条件」をなしていた。よって価値観変化の理論は「欲求階層論」と「政治世代論」とで説明されるということになる。そしてその定義からみて「欲求階層論」と「政治世代論」に対応するのが、イングルハートが八一年論文でいった「欠乏仮説」と「社会化仮説」であるといえる。

(6) Inglehart (1981), p.881.

(7) この欠乏仮説にあたるものを「静かなる革命」では次のように説明していた。つまり、「およそ人間というものは、何であれ手に入れない欲求を優先させる傾向をもつ」この欠乏仮説はマズローの欲求段階論と大きく関係している。

(8) Inglehart (1981), p.881.

(9) これも「静かなる革命」においては「人間は、ひとたび人格形成期に確立された一定の価値優先順位を、成年期全体を通して保持するという仮説である」と説明されているものにあたる。

(10) Dalton (1977), pp.465-9.

(11) 具体的には本稿第一章第三節参照。

- (12) Inghart (1981), p.886.
- (13) Inglehart (1971), pp.1000-9.
- (14) Inglehart (1981), p.889 : Fig.2.
- (15) Inghart (1981), p.885.
- (16) Inglehart (1981), p.887.
- (17) Bötken/Jagodzinski (1985).
- (18) 主に経済状況の短期的変化ばかりではなく、長期的変動にも影響されることになる。ベルケンIIヤゴジンスキーは長期的変動の場合を trends 効果と呼んでいる。
- (19) コーホートとは一定の幅の出生年に生まれた人々の集団のことで、ここでは「世代」と同じような意味になるが、分析のために操作化されて用いられている。例えば、ベルケンIIヤゴジンスキーのこの研究では、一九四六―五五年生まれのコーホートから一九一六年以前生まれのコーホートまでを十年の幅で設定している。
- (20) Bötken/Jagodzinski (1985), p.471.
- (21) イングルハートは年齢層ごとに分けてその推移をみた。それに対してベルケンIIヤゴジンスキーはコーホートごとに分けてその推移をみている。これによってそれぞれのコーホートの価値観がどのように変わっているかがよくわかるのである。
- (22) Bötken/Jagodzinski (1985), pp.478-9.ただし、恒例コーホートにかんじていえば、それはイングルハートのいう「加齢効果」による単線的な変化とはむしろ逆、つまり、脱物質主義の増加という変化を示している。ここに、ベルケンIIヤゴジンスキーのいう「ライフサイクル」効果とイングルハートのいう「加齢効果」との微妙かつ重要なニュアンスの違いがある。また、ベルケンIIヤゴジンスキーが高齢コーホートの「ライフサイクル」変化としているものは、むしろイングルハートの欠乏仮説から説明できる、「時代効果」による変化とみることもできる。
- (23) Inglehart (1985a).
- (24) この論文の前半では、ラファティルクヌットセン (Lafferty/Knutson (1985)) とセイヴィッジ (Savage (1985)) によるイングルハート理論に対する批判に回答しているが、これらは、物質主義―脱物質主義と左―右イデオロギー次元との関係の問題であり、本稿ではとりあげない。セイヴィッジにかんしては次章でとりあげている。
- (25) この論文でイングルハートは、ベルケンIIヤゴジンスキーの得た結果を、サンプリングと回帰分析の手法という二つの技術的問題によるものとしながら、これらサンプルの扱い方と回帰分析を行う期間とを修正し、価値観変化が世代効果と時代効果と

ら説明されるという結論を導き、ヘルケン＝ヤゴジンスキーに反論している (Inglehart (1985a), p.528)。

- (26) Van Deth (1983).
- (27) Van Deth (1983), p.66.
- (28) Inglehart (1983).
- (29) Inglehart (1983), p.81.
- (30) ヴァン・デットに対する反論の中でイングルハートは改めてこう説明している。つまり、「欠乏仮説は時代効果を含意している」し「社会化仮説は長期間にわたるコーホート効果も存在するということを含意している」。ただし「その理論は加齢 (aging) やライフサイクル効果にかんすることはいつさい含意していない」(Inglehart (1983), p.82)。
- (31) ヴァン・デットの調査は、任意の回答者による調査とは違って、それよりも手間のかかるパネル調査であり、小規模な調査プロジェクトであるために、データの不足が生じたのだといえる。だが、ヴァン・デットの行っているようなコーホート分析のさいには、全サンプルをコーホートという出生年代別のグループに分けるので、ひとつのコーホートのサンプル数は小さくなる。イングルハートによれば、ヴァン・デットの調査ではそれが七五と小さくなっている、これでは全く不十分だというわけである。
- (32) ただし、これはパネル調査ではないため、ヴァン・デットの行った「個人レベル」での分析は行えない。したがってイングルハートは「全体レベル」での分析を行っている。
- (33) Inglehart (1983), p.85 : Fig.1.
- (34) Inglehart (1985b).
- (35) サンプルをコーホートごとに分けてその経年変化をみるのがコーホート分析であるが、八一年論文では、イングルハートは、サンプルを年齢層ごとに分けた分析しか行っておらず、コーホート分析は行っていない。
- (36) Inglehart (1985b), pp.102-14.

第三章 マクロレベルへの展開 ―一九八〇年代後半―

七〇年代における『静かなる革命』のなかでみられた、政治のマクロな変化の議論では、政治社会レベルでの現

象、それもとりわけ、社会運動のような非制度的なものが言及されているだけで、政党や政党システムのような、体制レベル、あるいは制度レベルでの変化までは論じられていなかった。ところが、一九八〇年代になって、西ヨーロッパを中心に緑の党のような新しい政党が登場し、それが政党システムに影響を与えるようになった。イングルハートの理論は、こうした新しい政党の登場とそれに伴う政党システムの変容を含む「ニューポリティクス」の諸研究のなかで、その分析枠組みとして適用されるようになる。そして、彼の議論自体もこのことから、マクロレベルを中心とした、しかも、政党や政党システムのような制度的変化を対象としたものへとシフトしていくことになる。

七〇年代の『静かなる革命』では、その第十章で、マクロレベルにおける「脱物質主義的現象」の諸事例が挙げられていた。すでに第一章で指摘したように、そこでとりあげられていたのは、西ドイツの学生運動やフランスの五月反乱といった、社会運動が中心であった。これに対し、八〇年代後半の諸研究においては、まず、西ドイツの緑の党やイギリスの社民党の例にみられる新しい左翼政党の登場、フランス共産党などの共産主義政党の凋落やイギリス労働党・西ドイツ社会民主党の分裂の例にみられる既成政党の変容といった、政党レベルでの諸現象が新たに言及されている。そして、たいへん興味あることに、アイルランドとベルギーの民族主義政党、イタリアのネオ・ファシスト政党、そしてフランスの国民戦線に代表される極右政党といった、新しい右翼政党にかんする言及も加わっている。

理論のデザインとして、先進社会における価値観変化が、政治亀裂の変化、すなわち社会階級による政治亀裂から価値観による政治亀裂へのシフトを引き起こし、それがマクロレベルにおける政治変動の原因となっているという点で、八〇年代における議論は七〇年代と大きく変わっていない。ただ、八〇年代後半の諸研究においてとりあげられている諸事例からわかるように、八〇年代後半の研究対象は、七〇年代の社会運動とは違って、政党や政党システムに移ってきているということができる。つまり、八〇年代後半のイングルハートの議論は、ミクロレベルの価値観変化から、マクロレベルの政治変動へとシフトしてきているのみならず、社会運動のような、非制度的な社会レベル

の現象から、政党や政党システムという制度的な体制レベルの現象へとその対象を変えてきているのである。

よって、一九八〇年代後半のイングルハートの理論的展開を扱う本章の力点は、彼の政党・政党システムにかんする議論におかれることになる。だが、政党や政党システムの変容は、イングルハートの議論において、政治亀裂の変化から説明されるため、まずは彼の政治亀裂の変化に関する議論を、七〇年代のそれと比較しながら検討してみることにする。また、八〇年代後半のイングルハートの研究の中で特徴的なものの一つに、新しい右翼に関する研究があるが、その位置付けを確定するためにも、従来のもことから変更を余儀なくされた彼の政治亀裂モデルについてみておく必要がある。そして、政治亀裂モデルの検討の後に、新しい政党にかんする議論、さらには政党システムの変容にかんする議論を順次検討していくことにする。

第一節 政治亀裂

政治亀裂とは、政治的対立の軸となるものである。⁽²⁾ 政治的対立軸は従来、左翼対右翼という、左―右イデオロギー対立軸として表現されてきた。工業社会においては、社会階級の間に政治亀裂が存在したため、こうした左―右イデオロギー次元において、左翼は労働者階級のイデオロギーを、右翼は中産階級のイデオロギーを意味していた。⁽³⁾

ところが、イングルハートはすでに七〇年代、政治亀裂にかんして、脱工業社会における価値観変化の結果、政治亀裂は社会階級によるものから、価値観によるもの（物質主義対脱物質主義）へと変わってきていると述べていた。

では、イングルハートの価値観亀裂における、物質主義―脱物質主義次元と、左―右イデオロギー次元とはどう関わっているのだろうか。彼は一九八四年の論文「西洋社会における変わりゆく政治亀裂の構造」⁽⁴⁾のなかで、この関係について論じている。⁽⁵⁾ そこで彼は、脱物質主義が左―右イデオロギー尺度のなかで左翼の方に位置すると指摘している。つまり、彼の図式によれば、物質主義―脱物質主義次元は、左―右イデオロギー次元と重なっているのである。

だが、価値観変化の過渡期的時期においては、左翼の中にかつての物質主義的な左翼と新しい脱物質主義的な左翼とが現れることになる。かくして、脱物質主義の左翼が新しい左翼として現れてくる。こうした新しい左翼の現れが、ある時は西ドイツ緑の党にみられるような新しい政党の出現として、ある時はイギリス労働党や西ドイツ社民党の分裂にみられるような既成左翼政党の分裂として生じるといっているのである。⁽⁶⁾

ところが、イングルハートは当初、新しい右翼にかんしてはほとんど言及していなかった。なぜなら、彼は、ニューポリテイクスを新左翼と同一視していたからである。かくして、彼はフラナガンによつて「新右翼に対する説明を何らしていない」⁽⁷⁾という批判を受けることになる。八〇年代後半になつて、新しい右翼の問題に取り組まざるをえなくなつた後にも、新しい右翼政党が物質主義者によつて支持されていることから、これを旧い右翼政党と同一視してしまつていたのである。確かに、新しい左翼が価値観変化の過渡期的時期において出現するのであれば、同時に、脱物質主義的右翼としての新しい右翼も出現するはずである。だが、彼の議論の中では新しい右翼の位置付けはなされていないのである（図・3）（1）を参照）。

この原因はいうまでもなく、彼が物質主義—脱物質主義次元と左—右次元とを明確に区別しなかつた点にある。よつて、新しい右翼を政治亀裂図式の中で位置づけようとするならば、左—右次元を、物質主義—脱物質主義亀裂とは別に定義された政治亀裂として確定する必要がある。こうした試みが、イングルハートの政治亀裂図式に対する諸批判のなかで行われている。

まず、J・セイヴィツジは、⁽⁹⁾イングルハートが物質主義—脱物質主義の次元を左—右次元と同一視し、これらを重ね合わせて論じた点に批判を加え、物質主義—脱物質主義次元とは別に左—右次元が存在すると述べている。つまり彼によれば、「将来の社会・政治亀裂は、単にイングルハートが予測するように、脱物質主義対物質主義になつていくのではなくて、むしろ少なくとも四つに分かれたもの、つまり、右と左の脱物質主義、そして右と左の物質主義と

なつて現れるだろう」⁽¹⁰⁾ というのである。そして實際、彼はヨーロッパ九カ国を調べて、左翼・物質主義も右翼・脱物質主義も存在することを確認している。⁽¹¹⁾ さらに、彼の研究によれば、右翼・脱物質主義が存在するのみならず、これが増加している国（フランス・ベルギー・イタリア）があることもわかつてゐる。⁽¹²⁾

このように、イングルハートの物質主義—脱物質主義の価値観亀裂とは別に左—右のイデオロギー亀裂も存在しているという政治亀裂の図式は、むしろ、イングルハートの考える図式よりも複雑で多元的になる。⁽¹³⁾ もつとも、セイヴィッジの議論においては、左—右イデオロギー次元というのが具体的に何を意味しているのかが明らかではない。その点、物質主義—脱物質主義次元とは別に、權威主義—リバタリアン次元を確定したフラナガンの政治亀裂図式のほうが明快であるといえよう。次に、フラナガンの議論について述べておこう。

S・フラナガンは、イングルハートの物質主義—脱物質主義という価値観亀裂に加えて、權威主義—リバタリアンというもう一つの政治亀裂の軸を提示している。⁽¹⁴⁾ 彼はまず、イングルハートの物質主義—脱物質主義を物質主義—非物質主義と言ひ替え、⁽¹⁵⁾ 物質主義に基づく政治をオールドポリティクス、非物質主義に基づく政治をニューポリティクスとする。そして、この物質主義—非物質主義の価値観亀裂とは別に、權威主義—リバタリアン次元の価値観亀裂の軸を導入する。⁽¹⁶⁾ これら二つの政治亀裂軸が交錯するなかで、彼は非物質主義のリバタリアン価値に基づくものを新しい左翼、非物質主義の權威主義的価値に基づくものを新しい右翼と位置づけた。このように、フラナガンの考える政治亀裂図式は、イングルハートの考えるものよりも複雑で多元的になる（図・3）の（2）および（3）を参照）。こうした政治亀裂図式のなかで、彼は、イングルハートの政治亀裂モデルからは見いだされなかった、新しい右翼の位置付けを確定したのである。

また、新右翼と新左翼とがどう区別されるのかは、具体的にはフラナガンの掲げるニューポリティクスの争点をみるとさらによくわかる。彼は新左翼の争点として、中絶自由化、ウーマンリブ（女性解放）、ゲイの権利、環境保護、

反核兵器、反対運動への支援、(政治への) 直接参加、マイノリティの権利が挙げられている。これらの多くは、イングルハートのいうニューポリティクスの争点と重複している。これに対して新右翼的争点としては、生存権、反ウーマンリブ、特殊創造説(神による万物の創造)、反ポルノグラフィ、強い防衛力、愛国心、法と秩序、移民反対、マイノリティの権利反対、が挙げられている。これらはいずれもイングルハートのいうニューポリティクスの争点には含まれていない¹⁷⁾。このことから逆に、イングルハートのいうニューポリティクスは新左翼だけを指していることがわかるし、フラナガン¹⁸⁾のいうニューポリティクスの争点は、このように新右翼の争点までも含む広い射程を有していることがわかる。

フラナガンの指摘した「新右翼」の問題は、八〇年代、新保守主義が台頭してくるなかで無視できない問題となってくる。こうした新保守主義の台頭を、イングルハートは、一九八九年のミンケンバーグとの論文「アメリカにおける新保守主義と価値観変化」のなかで説明している。フラナガン論争の後、イングルハートが新右翼、あるいは新保守主義の台頭をどうとらえているかという観点からこの論文に少し立ちいてみることにしよう。

結論からいえば、イングルハートは、こうした新保守主義の登場が、階級や古い党派による政治亀裂を反映したものではなく、価値観の違いによる亀裂を反映したものであるという。ここでもやはり、イングルハートの従来の政治亀裂理論が踏襲されている。ただ、きわめて重要なのは、この論文のなかで、彼は新右翼―新左翼軸を設定し、しかも、「このモデルによって、新たな対立軸の結果、古い政治次元が消えてなくなるといつているのではない。そうではなくて、旧右翼・旧左翼の分極やイデオロギー的分離が新たな対立軸に基づく分極に直面して小さくなる¹⁹⁾といっているのである」と、多元的な政治亀裂モデルも提示しているのである(図・4を参照)。

こうして、現実問題としての新右翼、新保守主義の勢力拡大をふまえ、また理論史上の問題としてのフラナガンらの批判をふまえながら、八〇年代後半におけるイングルハートの政治亀裂モデルは、新右翼と新左翼の存在を位置づ

けた、多元的モデルへと変更されているのである。

第二節 新しい政党

一九七〇年代における、マクロレベルの政治変動の議論では、一九六〇年代終わり頃からの急激な社会運動の噴出がその動機となっているので、そこでは、「静かなる革命」が政党といった制度的形態をとることは予測されていなかった。だが実際には、一九八三年に緑の党が西ドイツ下院に議席を得たことに代表されるような、新しい政党の出現や既存政党の変容・分裂といった制度レベルでの変化が脱物質主義によるものと解釈されるようになる。こうした状況のなかで、イングルハートの理論は数多くの「ニューポリティクス」研究者たちの分析枠組みとして応用されている。

まず、イングルハート自身、その関心の対象を政党レベルにシフトさせてきていることは、ラビエとの一九八六年の論文やフラナガン論文と並載された一九八七年の論文などのなかに散見される、脱物質主義的現象の諸事例をみても明らかである。そこではまず、環境政党に代表される新左翼政党の登場や既成左翼政党の分裂・変容が事例として挙げられ、次に、民族主義政党や極右政党などの新しい右翼政党の登場について触れられているのである。

ところが、イングルハート自身のニューポリティクス政党への関心は、決して大きいとはいえない。この理由として、一つは、イングルハートの価値観変化理論から新しい政党の登場や政党システムの変容の問題を説明しようとするには、その間にあるさまざまな要素を捨象しなければならないからではないかと考えられる。つまり、イングルハートの議論はせいぜい、政治亀裂という社会レベルでの現象を説明するまでであって、それが投票行動にいかなる影響を及ぼし、しかもその投票行動が、実際の選挙結果にどのような影響を及ぼし、さらにその選挙結果が政党システムにどのような影響を及ぼすのかという制度レベルでの政治変動までも説明するのには、「価値観」という変数

のみならず、それ以外にもさまざまな変数を考える必要があるからである。⁽²²⁾さらに、脱物質主義には制度的なものを嫌うという属性があると考えられていたので、脱物質主義者は、政党を形成するという制度的な手法よりも、直接的な社会運動のような手法の方を好むと考えられていたのである。⁽²³⁾

これらのことは実際に、ニューポリティクス政党への投票意図と投票行動とのギャップ、つまりニューポリティクス政党を支持する人々の割合と、実際にこれに投票する人々の割合とのギャップに現れており、これをイングルハートは一九八四年の論文で検証している。⁽²⁴⁾そこではまず、ニューポリティクスは、投票行動よりも社会運動のような能動主義として現れるということがわかつている。⁽²⁵⁾また、脱物質主義者は投票による政党支持という手段は用いないが、社会の変革は強く望んでいるということもわかつている。⁽²⁶⁾総じて、脱物質主義者は、投票という手段を好まない。ゆえに、ニューポリティクス政党は、支持されることはあっても、実際に選挙で票を得ることは少ないのである。

確かに、七〇年代まで脱物質主義は社会運動というかたちで現れていたかもしれない。だが、実際には、脱物質主義者は政党を支持したり、あるいは政党を形成するような制度的手段を好まないにもかかわらず、脱物質主義政党が出現するという矛盾が生じることになる。現に、一九八〇年代後半から増えてくる「ニューポリティクス」研究は主に環境政党など新左翼政党を中心とした脱物質主義（ニューポリティクス）政党を研究対象とする。⁽²⁷⁾そしてこれらの研究のなかの少なからざるものが、イングルハートの理論枠組みを用いて、こうしたニューポリティクス政党の出現を説明しているのである。

たとえば、ニューポリティクスの主要な研究を集めた論文集『ニューポリティクス』の序文ではこう書かれている。「明らかに、西洋の政治・社会におけるこれらの重要な変化を理解する、最も影響力のあるアプローチは、イングルハートによって導入された。彼は、西洋の人々の間での漸進的かつ持続的な価値観のシフトはニューポリティク

スに対する支持の増加を説明する最も重要な原因であると主張する⁽²⁸⁾」。

実際、この論文集のなかの多くの研究がイングルハートの分析枠組みを前提としている。すでにみたように、イングルハート理論の特徴（それは同時に批判的でもあったが）は、社会レベルと個人レベルとの相互の関係を扱った点にあった。そして、多くの研究者たちにとって、ニューポリティクス政党は、これら個人と社会の間をつなぐ、制度的なチャネルに他ならなかった。ゆえに、彼らは、イングルハート理論を検討する素材として、あるいは逆にイングルハート理論をフレームワークとしながら、ニューポリティクス政党を分析することになったのである⁽²⁹⁾。

こうしたニューポリティクス政党の研究のなかで、政治亀裂の議論とも関連して重要なのは、ポグントケやキツチェルトIIヘレマンズ⁽³¹⁾の研究である。彼らは、環境政党がひとくりにニューポリティクス政党とはいえないことを指摘して、政治亀裂の多元化を主張している。まずポグントケはニューポリティクス自体のなかにも左―右次元が含まれていることを示し、さらに従来、新左翼に含められていた環境政党も、そのなかに保守的なものと進歩的なものとがあることを、西ドイツ、オーストリア、スウェーデンの例から説明している。次に、キツチェルトとヘレマンズは、意味論的アプローチから、エリートのイデオロギー的言説を分析して、やはり、ニューポリティクス政党のなかに分裂がみられることを指摘している。彼らは、環境政党が左―右次元にはいらないとする説（「変容理論」、「持続理論」）に反論して、「イデオロギー的多元理論」を提示しているが、そこで提示される多元モデルは、ポグントケと同様、フラナガンのモデルよりもさらに複雑になっている。というのも、フラナガンが環境政党を新左翼のなかにカテゴライズするのに対して、環境政党のなかにも亀裂が存在していることが明らかにされているからである。

政治亀裂の多元的モデルに従えば、新左翼政党のみならず新右翼政党も存在することになる。また、環境政党など新左翼政党を主な対象とするニューポリティクス政党の研究からは、新しい政党のなかにも、さらに多元化の契機が存在することが明らかになっている。もともと、イングルハートも指摘しているように、⁽³²⁾ 違いは限りなく見いだせる

ので、政治亀裂も無限に細分化できることも確かである。問題は、多元化を見つけたすことではなく、現実問題として、多元化の方向にあるのかということである。その意味では、たとえば仮に緑の党のなかで分裂が見いだされたとしても、現実問題として緑の党が分裂の危機になれば、その分裂を論じる意味は薄いといえる。だが、逆にいうと、価値観の多元化が、現実問題として、既成政党の分裂や、新たな政党の登場をもたらしたからこそ、論じる意味があるのだともいえる。新右翼にしても、確かに七〇年代には論じる必要がなかったかもしれないが、現実問題として、八〇年代には極右政党などが登場しているからこそ、これを明確に位置づける必要がでてくる。その意味で、新しい政党の研究とおして見いだされた政治亀裂の更なる多元化は、ニューポリティクスの時代における政治勢力の多元化、ないしは細分化を示しているといえるであろう。

第三節 政党システム

以上で見てきたような、政治亀裂の多元化、そしてニューポリティクス政党の登場とその更なる多元化は、政党システムにいかなる影響を与えるのであろうか。さらにそれはマクロな政治の変動にどう影響するのであろうか。

一九八四年、いちちはやく政党システムの変化を分析した論文集『先進工業諸国における選挙変化』⁽³³⁾（以下『選挙変化』という）が、各研究者によって出されているが、このなかでも、イングルハートの理論が、政党システム変容の分析枠組みとして、各研究でとりあげられている。

『選挙変化』では、政党システムの変容を、「再編成 (realignment)」と「脱編成 (dealignment)」という仮説で説明し、先進諸国の事例からその証拠をえている。⁽³⁴⁾ここで、政党システムの「再編成」とは「政党への連合の集团的基礎における著しい変化、たいていの場合、その結果としての政党間の支持の分配における著しい変化」⁽³⁵⁾と定義される。そしてこの「再編成」は「社会亀裂モデル」から説明される。「社会亀裂モデル」とは、政治的対立軸が社会

(政治) 亀裂に沿って生じるため、政党システムはこうした政治亀裂のありかたに大きく影響されているというものである。⁽³⁶⁾ 従って、政治亀裂の変化は政党システムに変化をもたらし、これが政党システムの「再編成」につながるということになるのである。⁽³⁷⁾ 他方、政党システムの「脱編成」とは、「厳密に言えば、伝統的な政党への一体性が薄れるにつれ、選挙民の政党加入部分が減少する」ことをいう。⁽³⁸⁾ これは「機能モデル」から説明される。「機能モデル」とは、いわば政党の機能の面から説明するアプローチである。フラナガン・ダルトンは、政党の三つのインプット機能を挙げ、⁽³⁹⁾ これらの政党のインプット機能が、マスコミの発達などの影響で近年弱まってきているという。こうした政党の機能低下から、政党への帰属・忠誠心が低下し、政党システムの「脱編成」が生じているというのである。

この「選挙変化」の第二章でイングルハートは、階級亀裂から価値観亀裂へのシフトとそれへの対応が政党および政党システムに与える影響を論じている。⁽⁴⁰⁾ そこで彼は階級、宗教、価値観といった社会背景となる変数が政党支持(投票意図、投票行動)あるいは変革志向とどのような関係にあるのかを検証しながら、結論として、「脱物質主義の登場によって、既存の政党編成(alignment)が継続的なストレスのもとにおかれる」⁽⁴¹⁾と述べている。そして、「既存の政党」に「継続的なストレス」が加わった結果、それが「脱編成」や「再編成」へとつながると述べている。だが、このときイングルハートは「脱編成」「再編成」のプロセスを、必ずしも、フラナガンのいうような「社会亀裂モデル」や「機能モデル」からは説明していない。彼は、脱物質主義的価値の増加にともなう脱物質主義争点の出現が、既存政党の争点領域の変化や新しく現れた政党によってとり入れられる場合に「再編成」が生じ、逆に、既存政党が脱物質主義争点のとり込みに失敗し、脱物質主義者の支持を得られないときには「脱編成」がすすむと説明する。

イングルハートは、ここまでみてきた諸業績のなかで、アメリカの一九七二年大統領選挙、イギリス労働党や西ドイツ社会民主党の分裂、西ドイツ緑の党の出現、フランスなどでの共産主義政党の衰退といった例を検証してい

た。これらの事例は、フラナガン・ダルトンの定義をとるにしても、イングルハートの定義をとるにしても、政党システムの「再編成」に、多かれ少なかれ、影響を及ぼしているといえよう。

こうした「再編成」の例は、新しい政治勢力、とりわけ新しい政党の出現や既存政党の分裂といった、目に見えるかたちであられるため、分析対象になりやすい。ところが逆に、「脱編成」の場合は、政党の機能低下、あるいは既存政党の勢力衰退としてあらわれるため、明らかな証拠は得難いといえるかもしれない。

だが、たとえば投票行動の研究をみたときに、「脱編成」の間接的証拠は得ることができる。たとえば、クレパスは欧米一六カ国を比較して、政党システムと投票率の関係について調べている。⁽⁴²⁾このとき、①政党分極度（イデオロギー的広がり）、②政党の数（端的には二大政党制か多党制かのちがい）、③脱物質主義政党の存在、④強制投票制度の有無、⑤比例代表でない程度、がどのように投票率に影響を与えているかを実証している。⁽⁴³⁾ここで重要なのは、③脱物質主義政党の存在と投票率の関係である。彼は「政党分極度の存在と脱物質主義の存在は投票率にたいして静態的には重要な影響を及ぼしている」と結論している。⁽⁴⁴⁾このように、「脱物質主義政党の存在」は、投票率に大きな影響を与えている。逆にいえば、脱物質主義政党のないところでは投票率は下がるといえるのである。つまり、脱物質主義政党の不在は、政党システムの「脱編成」につながるといえるのである。

むろん、新たに脱物質主義政党が出現するかどうかは、西ドイツの緑の党やイギリスの社民党の例を挙げてイングルハートが述べていたように、制度的障害、とりわけ選挙制度という障害が大きく影響している。⁽⁴⁵⁾だが、必ずしも新しい政党があらわれなくても、既存政党が脱物質主義争点にまで争点領域を広げることによって、脱物質主義者の支持を得ることは可能であるわけだし、逆にいうと、争点領域の拡大に失敗すれば、脱物質主義者の支持を得ることはできないことになる。⁽⁴⁶⁾本稿ですでにみてきたように、脱物質主義は基本的趨勢として増加傾向にあるので、脱物質主義者の支持を失うということは政党の勢力そのものを縮小させることになるのである。フラナガンらの説明か

らすると、政党のインプット機能の低下から、脱物質主義争点へのシフトに失敗することで、「脱編成」が起きることになるのである。

また、イングルハートが当初から指摘していたように、脱物質主義者は制度的手段や組織化を好まない。こうした脱物質主義の性格は、脱物質主義的現象が、社会運動のような形態で現れているときには問題がなかったが、政党のような組織化された、制度的手段として現れると、そこに矛盾が生じてくる。とりわけ、ニューポリティクス政党と
は主に、新左翼政党をあらわしており、フランガンの位置付けによれば、新左翼政党とは、脱物質主義かつリバタリ
アンであつたこと⁽⁴⁷⁾から、そのリバタリアンとしての性格と、政党という制度的手段との矛盾が生じてくる⁽⁴⁸⁾。

こうした傾向は政党内部での凝集性を高めることができず、少しい意見の相違から分裂を引き起こし、同じニュー
ポリティクス政党のなかでも微妙な路線の違いから分派を形成することにもなりやすい⁽⁴⁹⁾。このように、かつての階級
政党は細かな点では様々な意見を持ちながらも広範な支持基盤を得ていた包括政党で、なおかつそうした広範な支持
者はこれらの政党に対して比較的強い忠誠心ないしは帰属意識をもっていた。これに対して、現在の新しい政党はた
いへん限られた争点領域しかもたない単一争点的な政党で、なおかつそうした限られた支持者もきわめて流動性が高
い。それゆえ、ニューポリティクスの政党システムといつてもそれは従来の政党システムにくらべて、きわめて曖昧
で流動的なものである。よつて、ミユラー・ロメルは、フランガンとダールトンが政党システムの「再編成」と呼ん
でいる、脱物質主義政党あるいはニューポリティクス政党の出現という現象は、脱物質主義に内在している原因に
よつて、むしろ政党システムの「脱編成」をもたらしているのではないか、と指摘している⁽⁵⁰⁾。

このように、新しい政党が現れたり、既成政党の争点領域が変わることで、確かに、政党システムの「再編成」は
生じているといえるかもしれない。だが、従来の政治亀裂にくらべて、脱工業社会の政治亀裂はたいへん曖昧で、多
元的で、流動的であるがゆえに、こうした亀裂に基づいて生じる政党システムの「再編成」は、むしろ「脱編成」に

近い状況にあるといえる。また、新しい左翼にかんじていうならば、そのリバタリアンの性格上、政党に対する支持や帰属心自体が希薄である。価値観変化にともなう政治亀裂の変化は、確かに政党システムの「再編成」と「脱編成」をもたらしめているといえるだろう。だが、「再編成」と「脱編成」のいずれが生じているのかといえ、これら「再編成と脱編成とは同時的な過程、あるいは補足的な過程である」⁽⁵⁾といえるであろう。

(1) Inglehart/Rabier (1986), Inglehart/Flanagan (1987).

(2) 政治亀裂にかんする古典的研究は、リブセットとロツカンによる研究であるが、彼らが、コーザリ、バーソンスなどのコンフリクト(対立)論をふまえながら、政治亀裂理論を構築していったようすを描いた、近年の邦語文献として、白鳥(一九九六)がある。そのほか、政治亀裂にかんする邦語文献として、荒木(一九九〇)、河田(一九八六)を参照。

(3) 左翼と右翼の厳密な定義は難しい。ここでは、政治社会学において従来支配的な見解であった、リブセットの定義を用いた。

(4) Inglehart (1984).

(5) 同様に、価値観の物質主義—脱物質主義次元と、左—右次元との関わりはすでに七〇年代、『静かなる革命』においても論じられており、それでも脱物質主義が左翼側に位置すると結論されている (Inglehart (1977), pp.229-34, 邦訳二二〇—二五頁)。本稿では第一章で述べておいた。ただし『静かなる革命』の段階ではそれが政党システムに与える影響までは考慮されていない。これに対して、一九八四年のこの論文は政党システムに与える影響が主題になっている。

(6) Inglehart (1984), p.28.

(7) Inglehart/Flanagan (1987), p.1305.

(8) Inglehart/Rabier (1986), Table 4.

(9) Savage (1985).

(10) Savage (1985), p.433.

(11) 左翼・物質主義：二八%

右翼・物質主義：三六%

左翼・脱物質主義：二二%

右翼・脱物質主義：一四%

(Savage (1985), pp.435-6)

(12) 右翼・脱物質主義の増加は、フランスでは国民戦線、ベルギーではエスニック政党、イタリアではネオ・ファシストなどの新しい右翼政党（ときに極右政党）の登場によるものと考えられる。これらの新しい右翼政党はイデオロギー的には右翼であるが、価値観でいうと脱物質主義であり、その意味でかつての右翼政党とは異なる。

(13) 「それゆえに、右翼脱物質主義の存在によって、脱物質主義社会における将来の政治対立のウィジョンは複雑になってくる。ところの、彼らはイングルハートのいう物質主義・脱物質主義区分に一つの次元をつけ加えることになるからである。」(Savage (1985), p.448)

(14) いずれも、「価値観」による亀裂である。よってフラナガン理論においては、「二つの価値観変化にかんする理論」が存在することになる。(Flanagan (1982a), pp.405-9.)

(15) 彼が「物質主義」「非物質主義」と言い換えたのは、オールドポリティクスを形成していた「物質主義」が経済的争点を中心としていたのに対し、ニューポリティクスを形成する「非物質主義」は非経済的争点を中心的にとりあげることに基づく。

(16) 権威主義ーリパタリアン次元は、四つのサブディメンションからなる。つまり、①禁欲 (austerity) — 放縱 (self-indulgence) ②敬虔・自己訓練 (piety/self-discipline) — 世俗的・自己寛容 (secularism/permissiveness) ③同調性 (conformity) — 独立 (independence) ④権威への献身 (deference) — 冷笑・自己主張 (cynicism/self-assertiveness) とある (Flanagan (1982a), pp.405-9.)

(17) Inglehart/Flanagan (1987), p.1306.

(18) Inglehart/Minkenberg (1989), p.91.

(19) そうした政治亀裂の考え方は、C・オッフエの図式 (Offe (1985), p.858 : Fig.3) から作成された図 (Inglehart/Minkenberg (1989), p.90 : Fig.3) に端的に現れている。この図式における新右翼・新左翼が権威主義ーリパタリアンに対応するののかどうかという点を除けば、ほとんどフラナガンの図式と同じであるといえる。

(20) Inglehart/Rabier (1986).

(21) Inglehart/Flanagan (1987).

(22) イングルハートは、イギリス自由党・社民党、そして西ドイツの緑の党の事例から、制度的障害が脱物質主義の制度的表現を阻害していることを示していた。

(23) もし、R・ミヘルスのいうように、政党において「寡頭性の鉄則」が不可避であるならば、脱物質主義者、とりわけ、フラナガンによって「リパタリアン」と呼ばれる、新左翼の脱物質主義者にとっては、政党そのものが、彼らの価値観にあわないもの

となる。現代社会において「寡頭性の鉄則」が通用するのかどうかはさておいても、制度的な組織としての政党というものが、多かれ少なかれ、彼らの価値観にあわなないことは確かだろう。

(24) Inglehart (1984).

(25) まず、①従来型の社会経済的な左―右亀裂という次元と、②支配層―反支配層という次元とを設定する。後者の次元はオールドポリティクスとニューポリティクスとの分極を表すものである。次に、これら二つの次元と投票行動との相関を調べると、第①次元の方が第②次元の亀裂よりも相関が大きいことがわかる。つまり、投票行動は従来型の社会経済的亀裂に沿って行われているということである。ところがデモなどの社会運動、つまり能動主義との相関でみると第②次元の方が大きいことがわかる。このことから、能動主義はオールドポリティクス―ニューポリティクスの次元で行われているということがわかるのである。

(26) この検証は以下のように行われている。まず、政治亀裂を宗教的亀裂と階級的亀裂と価値観的亀裂との三つにわけると、これらを投票行動における左―右次元尺度、自己の位置付けにおける左―右次元尺度、社会変革支持における左―右次元尺度との関係でみると、次のようなことがわかる。投票行動においては宗教・階級・価値観の順で相関があり、左―右イデオロギ―次元においては宗教・価値観・階級の順で、また社会変革の支持においては価値観・宗教・階級の順で相関がある。ここで価値観に注目するならば、価値観による亀裂は投票行動ではあまり現れず、イデオロギ―的な自己認識ではやや影響し、社会変革にたいする支持は価値観が大きく反映されるということがわかるのである。

(27) 「ニューポリティクス政党」として研究対象となるのは、ほとんどが、環境政党を中心とする、新左翼政党である。これは、ニューポリティクスを新左翼と同一視するイングルハートの政治亀裂モデルを、多くの研究者が踏襲しているからであろう。

だが、前節でみたように、フランガンの政治亀裂モデルに基づくならば、ニューポリティクスには新右翼も含まれるはずでありニューポリティクス政党としての新右翼政党も分析の対象となりうるはずである。こうした、数少ないニューポリティクス政党としての新右翼政党を分析した業績として、Minkenberg (1992) がある。

(28) Müller-Rommel/Poguntke (1995). Introduction, p.xiii.

(29) だが、ニューポリティクス政党の出現を「静かなる革命」によるものだとする仮説に対する反論も多い。まず、H・G・ベッツは、一九八三年選挙で初めて議会に進出してきた西ドイツの緑の党は、この選挙において、教育水準は高いが決して経済的に豊かではない人々によって支持されていたことを明らかにした(Betz (1990))。また、ビュルクリンは、緑の党が経済停滞の時期に隆盛してきて、再び経済成長が始まるとともに消えていく運命にある過渡期的現象にすぎないと主張している(Bitkin (1987))。こうしたビュルクリンの研究に対しては、キッチェルトが反論している(Kitchelt (1988))。さらにクロイザーは、オー

ストリアとスイスにおける環境政党を研究して、イングルハートの価値観による説明だけでなく、文化的・歴史的構造の影響の大きさを強調している (Kreuzer (1990))。

(30) Poguntke (1987).

(31) Kitschelt/Hellems (1990).

(32) イングルハートはこれを「バリマックス・シンドローム」と呼んでいる (Inglehart (1982), p.458)。

(33) Dalton/Flanagan/Beckeds (1984).

(34) Dalton/Flanagan/Beck (1984b) および Flanagan/Dalton (1984).

(35) Dalton/Flanagan/Beck (1984a), p.13.

(36) 社会亀裂に関する古典的研究として Lipset/Rokkan (1967) がある。

(37) 「ラネ (Jan-Eric Lane) とアーンソン (Svante O.Ersson) は、クリーヴィッジ (本稿では「亀裂」と呼んでいる…金丸) を「そのあいだでコンフリクトの起こりうる個人、集団、あるいは組織の何らかの基準の基盤に関する分裂である」と定義づけ、また、政党は「それを通じて選挙民の編成が起こるクリーヴィッジのアイデンティフィケーションの基盤の上に組織する」という。」 (白鳥 (一九九六) 一六七頁)。

(38) Dalton/Flanagan/Beck (1984a), p.14.

(39) ①人々の利害の明確化と整理、②人々にはつきりした選択肢を提供するための利害のとりまとめと選別、③政治的職務への徵用、の三点が挙げられている。

(40) Inglehart (1984).

(41) Inglehart (1984), p.68.

(42) Crepaz (1990).

(43) 選択の幅が広がるという意味では、①政党分極度や②政党の数が大きいほど、また③脱物質主義政党の存在があるほど、投票率は上がるということになり、何らかの強制投票制度のある国はやはり投票率は高くなるだろうし、完全な比例代表制に近いほど、投票率は高くなるだろう。

(44) Crepaz (1990), p.200.

(45) Inglehart/Rabier (1986), pp.464-5.

(46) 「そこで明瞭に現れるのは投票者の側の社会構造の変化、新たなイデオロギー次元の出現、争点の変化に政党の側が自律的に

対応し、政党システムの変化を最小限に食い止める努力を行っている事である。これはたとえば、現在、既存政党の多くが環境問題を重要な争点として取り上げるようになった事からも明らかである。」（白鳥（一九九六）一七三頁）。

(47) また、H・キツチェルトは、新左翼のリバタリアンとしての性格を強調して、「左翼リバタリアン」と呼んでいる。（Krischelt (1988)）。

(48) フラナガンの権威主義―リバタリアン次元のサブディメンジョンをみれば、彼のいうリバタリアンが政党に対する忠誠心や帰属心をもたない性格であることがさらによくわかる。

(49) Poguntke (1987)。

(50) Müller-Rommel (1985)。

(51) Flanagan/Dalton (1984), p.474。

おわりに

本稿の目的はイングルハート理論の展開過程を検討することにあつた。そしてここまで、彼の理論の展開を検討してきて、彼の理論が、当初はミクロレベル、非制度レベルでの議論に偏りがちであつたのが、後にマクロレベル、制度レベルでの議論に展開してきていることが明らかになつた。

イングルハートの理論は一九七〇年代に「静かなる革命」と題して発表された。その理論は、経済的に豊かになつた脱工業社会において、人々の価値観は、物質主義から脱物質主義へと変化し、こうした価値観変化が先進社会の政治変動を引き起こしているというものであつた。この「静かなる革命」理論の特徴は、マクロな政治変動という現象を、ミクロな個人の価値観という観点から説明したという点にあつたが、他方で、イングルハート自身の問題関心は、マクロな政治変動の解明にあつた。この時期彼は、頻発する社会運動を見据えながら、マクロレベルの政治変動として、社会レベル・非制度レベルの現象をとりあげていた。そのマクロレベルの政治変動に対する問題関心にもか

かわらず、調査データの蓄積という研究環境の整備のなかで、イングルハート理論をめぐる議論は、一九八〇年代前半、ミクロレベルの価値観変化理論に集中するようになった。

ところが、一九八〇年代の後半になると、新しい政党の出現、またそれによる政党システムの変容といった、マクロレベルでのニューポリティクスの諸現象が、イングルハートの理論枠組みを用いて説明されるようになった。この時期、イングルハートの理論はミクロレベルの議論からマクロレベルの議論を中心にしたものへと展開していった。また同時に、七〇年代とは違って、彼の理論枠組みは、社会運動などの非制度的な社会レベルでの現象ではなく、政党や政党システムという制度的な、体制レベルでの現象を説明するようになった。

このように、イングルハートの理論は、それがニューポリティクスの分析枠組みとして用いられるようになるなかで、明らかにマクロレベル・制度レベルへと展開してきている。もともと、イングルハート自身は、依然として、制度レベルよりも非制度レベルの現象に関心があるように思われる。だが、イングルハート自身の関心が少なからず社会レベル・非制度レベルにあるにしても、実際問題として、政治変動は新しい政党の出現とそれに伴う政党システムの変容というかたちをとって現れている。こうした、政治変動の現状を説明するには、「静かなる革命」がどのような、政治過程ないしは政治体制レベルでの変化として、あるいは制度的な変化として現れてくるのかを論じる必要があるだろう。よって本稿では、イングルハート以外のニューポリティクス研究者の議論もとりあげながら、政党や政党システムといった制度レベルでの変化について検討してみた。これらニューポリティクスの諸研究にみられるように、イングルハートの「静かなる革命」理論の可能性は、新しい政党や政党システム変容の分析枠組みとしての適用のなかに見いだされるのである。

文献リスト (カッコ内の数字は、初出年を示す。註における文献指示は、著者名と初出年とで行っている。)

〈外国語文献〉

- Alford, R.A. (1963) *Party and Society : The Anglo-American Democracies*, Chicago, Rand McNally.
- Barns, S.H./M. Kaase eds. (1979) *Political Action*, Beverly Hills, Sage.
- Bell, D. (1973) *The Coming of Post-Industrial Society*, New York, Basic Books.
- 区田昭夫 廣知民院 政黨論 政黨論 政黨論 (一六五頁) 『政治學研究の未來』(一・二) ミヤギヤハシ社
- Betz, H.G. (1990) "Value Change in Postmaterialist Politics : The Case of West Germany", *Comparative Political Studies* 23, pp. 239-56.
- Böhlen, F./W. Jagozinski (1985) "In an Environment of Insecurity : Postmaterialism in the European Community, 1970 to 1980", *Comparative Political Studies* 17, pp.453-84.
- Budge, I./I. Crewe/D. Farlie eds. (1976) *Party Identification and Beyond*, London, John Wiley.
- Burklin, W.P. (1987), "Governing Left Parties Frustrating the Radical Nonestablished Left : The Rise and Inevitable Decline of Greens", *European Sociological Review* 3, pp.109-26.
- Butler, D./D. Stokes eds. (1969) *Political Change in Britain : Forces Shaping Electoral Choice*, London, Macmillan St. Martin's Press.
- Crepaz, M. (1990) "The Impact of Party Polarization and Postmaterialism on Voter Turnout : a Comparative Study of 16 Industrial Societies", *European Journal of Political Research* 18, pp.183-205.
- Dalton, R.J. (1977) "Was There Revolution?", *Comparative Political Studies* 9, pp.459-73.
- Dalton, R.J./S.C.Flanagan/P.A. Beck eds. (1984), *Electoral Change in Advanced Industrial Democracies*, Princeton, Princeton Univ. Press.
- Dalton, R.J./S.C. Flanagan/P.A. Beck (1984a), "Electoral Change in Advanced Industrial Democracies (introduction)", in Dalton/Flanagan/Beck eds. (1984), pp.3-22.
- Dalton, R.J./S.C. Flanagan/P.A. Beck (1984b), "Political Forces and Partisan Changes (conclusion)", in Dalton/Flanagan/Beck eds.

- (1984), pp.451-76.
- Flanagan, S.C. (1979) "Value Change and Partisan Change in Japan", *Comparative Political Studies* 11, pp.253-78.
- Flanagan, S.C. (1980) "Value Cleavages, Economic Cleavages, and the Japanese Voter", *American Journal of Political Science* 24, pp. 177-206.
- Flanagan, S.C. (1982a) "Changing Values in Advanced Industrial Societies", *Comparative Political Studies* 14, pp.403-44.
- Flanagan, S.C. (1982b) "Measuring Value Change in Advanced Industrial Societies: A Rejoinder to Inglehart", *Comparative Political Studies* 15, pp.99-128.
- Flanagan, S.C. (1984) "Electoral Change in Japan: A Study of Secular Realignment", in Dalton/Flanagan/Beck eds. (1984), pp. 159-204.
- Flanagan, S.C./R.J. Dalton (1984) "Parties under Stress: Realignment and Dealignment in Advanced Industrial Societies", *Western European Politics* 7, pp.7-23.
- Gibbins, J.R. ed. (1989) *Contemporary Political Culture: Politics in a Postmodern Age*, London, Sage Publications.
- Goldthorpe, J. et al. (1968) *The Affluent Worker: Political Affairs and Behavior*, Cambridge, Cambridge Univ. Press.
- Huntington, S.P. (1974) "Post Industrial Politics: How Benign Will It Be?", *Comparative Politics* 6, pp.163-91.
- Ike, N. (1973) "Economic Growth and Intergenerational Change in Japan", *American Political Science Review* 67, pp.1194-203.
- Inglehart, R. (1971) "The Silent Revolution in Europe: Intergenerational Change in Post-Industrial Societies", *American Political Science Review* 65, pp.991-1017.
- Inglehart, R./H. Klingemann (1976) "Party Identification, Ideological Preference and the Left-Right Dimension among Western Mass Publics", in Budge/Crewe/Farlie eds. (1976), pp.243-73.
- Inglehart, R. (1977), *The Silent Revolution*, Princeton, Princeton Univ. Press.
- 三宅一郎・金丸輝男・富沢克詠 (一九七八) 『静かなる革命』東洋経済新報社。
- Inglehart, R. (1977b) "Political Dissatisfaction and Mass Support for Social Change in an Advanced Industrial Society", *Comparative Political Science* 10, pp.455-72.
- Inglehart, R. (1977c) "Value Priorities, Objective Need Satisfaction and Subjective Satisfaction among Western Publics", in *Comparative Political Studies* 9, pp.429-58.

- Inglehart, R./Hans D.Klingemann (1979) "Ideological Conceptualization and Value Priorities", in Barns/Kaase eds. (1979), pp.203-14.
- Inglehart, R. (1979a) "Value Priorities and Socioeconomic Change", in Barns/Kaase eds. (1979), pp.305-42.
- Inglehart, R. (1979b) "Political Action", in Barns/Kaase eds. (1979), pp.343-80.
- Inglehart, R. (1981) "Post-Materialism in an Environment of Insecurity", *American Political Science Review* 75, pp.880-900.
- Inglehart, R. (1982) "Changing Values in Japan and West", *Comparative Political Studies* 14, pp.445-79.
- Inglehart, R. (1983) "The Persistence of Materialist and Post-Materialist Value Orientations : Comments on Van Deth's Analysis", *European Journal of Political Research* 11, pp.81-91.
- Inglehart, R. (1984) "Changing Structure of Political Cleavages in Western Society", in Dalton /Flanagan/Beck eds. (1984), pp.25-69.
- Inglehart, R. (1985a) "New Perspectives on Value Change", *Comparative Political Studies* 17, pp.485-532.
- Inglehart, R. (1985b) "Aggregate Stability and Individual-Level Change in Mass Belief Systems : The Level of Analysis Paradox", *American Political Science Review* 79, pp.97-116.
- Inglehart, R./J. Rabier (1986) "Political Realignment in Advanced Industrial Society : From Class-Based Politics to Quality of Life Politics", *Government and Opposition* 21, pp.456-79.
- Abramson, P.R./R. Inglehart (1986) "Generational Replacement and Value Change in Six West European Societies", *American Journal of Political Science* 38, pp.1-25.
- Inglehart, R./S.C. Flanagan (1987) "Value Change in Industrial Societies", *American Political Science Review* 81, pp.1289-319.
- Abramson, P.R./R. Inglehart (1987) "Generational Replacement and the Future of Postmaterialist Values : Population Replacement Effects, 1970-1985 and 1985-2000", *Journal of Politics* 49, pp.231-41.
- Inglehart, R. (1988) "The Renaissance of Political Culture", *American Political Science Review* 82-4, pp.1203-30.
- Inglehart, R./M. Minkenberg (1989) "Neoconservatism and Value Change in the U.S.A. : Tendencies in the Mass Public of a Postindustrial Society", in Gibbins ed. (1989), pp.81-109.
- Inglehart, R. (1989) "Observation an Cultural Change and Postmodernism", in Gibbins ed. (1989), pp.251-6.
- Inglehart, R./Siemieniska (1990) "Political Values and Dissatisfaction in Poland and the West : A Comparative Analysis", *Government and Opposition* 23, pp.440-57.
- Inglehart, R. (1990) *Culture Shift in Advanced Industrial Society*, Princeton, Princeton Univ. Press.

村山皓司・富沢克・武重雅文訳（一九九三）『カルチャーシフトと政治変動』東洋経済新報社。

Abramson, P.R./R. Inglehart (1992) "Generational Replacement and Value Change in Eight West European Societies", *British Journal of Political Science* 22, pp.183-228.

Inglehart, R./P.R. Abramson (1994) "Economic Security and Value Change", *American Political Science Review* 88-2, pp.336-54.

Kitschelt, H. (1988) "Left-libertarian Parties in Western Democracies ; Explaining Innovation in Competitive Party System", *World Politics* 40-2, pp.194-234.

Kitschelt, H./S. Helmans (1990) "The Left-Right Semantics and the New Politics Cleavage", *Comparative Political Studies* 23, pp. 210-38.

Krenzer, M. (1990) "New Politics : Just Post-Materialist? The Case of the Austrian and Swiss Greens", *West European Politics* 13, pp.12-30.

Lafferty, W.M./O. Knutsen (1985) "Postmaterialism in a Social Democratic State : An Analysis of the Distinctness and Congruity of the Inglehart Value Syndrome in Norway", *Comparative Political Studies* 17, pp.411-30.

Lipset, S.M. (1959), *Political Man : The Social Bases of Politics*, New York : Doubleday and Co..
内山秀夫訳（一九六三）『政治のなかの人間』東京創元新社。

Lipset, S.M./S. Rokkan, eds. (1967), *Party System and Voter Alignments : Cross-National Perspectives*, New York, Free Press.

Lipset, S.M./S. Rokkan (1967) "Cleavage Structure, Party Systems and Voter Alignments : An Introduction", in Lipset/Rokkan, eds. (1967), pp.1-63.

Marsh, A. (1975) "The Silent Revolution, Value Priorities, and Quality of Life in Britain", *American Political Science Review* 69, pp. 21-30.

Maslow, A.H. (1954), *Motivation and Personality*, New York, Harper and Row.

小口義徳監訳（一九七八）『人間性の心理学』産能大学出版部。

Minkenberg, M. (1992), "The New Right in Germany : The Transformation of Conservatism and Extreme Right", *European Journal of Political Research* 22, pp.55-81.

Müller-Rommel, F. (1985) "The Greens in Western Europe : Similar but Different", *International Political Science Review* 6-4, pp. 483-99.

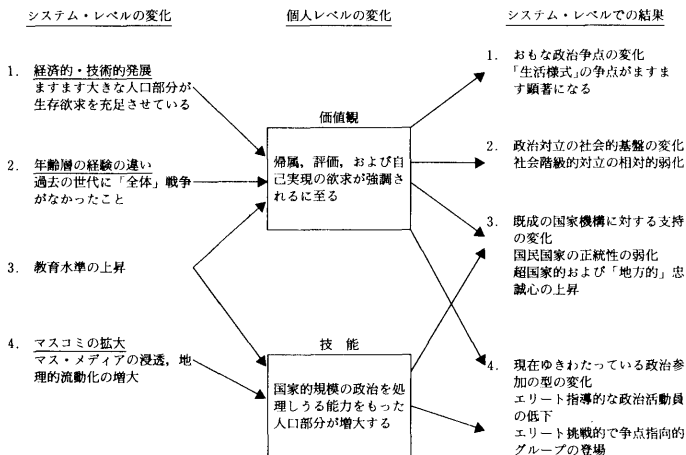
- Muller-Rommel, F./T. Poguntke (1995), *New Politics*, Aldershot, Dartmouth.
- Offe, C. (1985) "New Social Movements : Challenging the Boundaries of Institutional Politics", *Social Research* 52, pp.817-68.
- Poguntke, T. (1987) "New Politics and Party Systems : The Emergence of a New Type of Party?", *West European Politics* 10-1, pp. 76-88.
- Savage, J. (1985) "Postmaterialism of the Left and Right : Political Conflict in Postindustrial Society", *Comparative Political Studies* 17-4, pp.431-51.
- Shively, W.Ph. (1991) "Review of Culture Shift in Advanced Industrial Society, by R.Inglehart", *Journal of Politics* 53, pp.235-8.
- Van Deth, J.W. (1983) "The Persistence of Materialist and Post Materialist Value Orientations", *European Journal of Political Research* 11, pp.63-79.

《邦語文献》

- 荒木宏（一九九〇）「民主主義と社会構造の比較政治学——社会的クリーヴィッジと民主主義——」（砂田・藪野編（一九九〇）、所収）。
- 蒲島郁男（一九八八）『政治参加』東京大学出版会。
- 河田潤一（一九八六）「社会的クリーヴィッジと政党システムの変化」（西川編（一九八六）、所収）。
- 白鳥浩（一九九六）「政党とイデオロギー」（白鳥・砂田編（一九九六）、所収）。
- 白鳥令・砂田一郎編（一九九六）『現代政党の理論』東海大学出版会。
- 砂田一郎・藪野祐三編（一九九〇）『比較政治学の理論』東海大学出版会。
- 武重雅文（一九八六）「脱物質主義的価値と政治変動」（西川編（一九八六）、所収）。
- 坪郷實（一九八九）『新しい社会運動と緑の党——福祉国家のゆらぎの中で——』九州大学出版会。
- 西川知一編（一九八六）『比較政治の分析枠組』ミネルヴァ書房。
- 三宅一郎（一九八九）『投票行動』東京大学出版会。
- 村上泰亮（一九八六）『新中間大衆の時代』中公文庫。
- 村山皓司（一九九一）「R・イングルハートの価値観変動の研究とその方法としての意識調査」『京都外国語大学研究論叢』三七号。

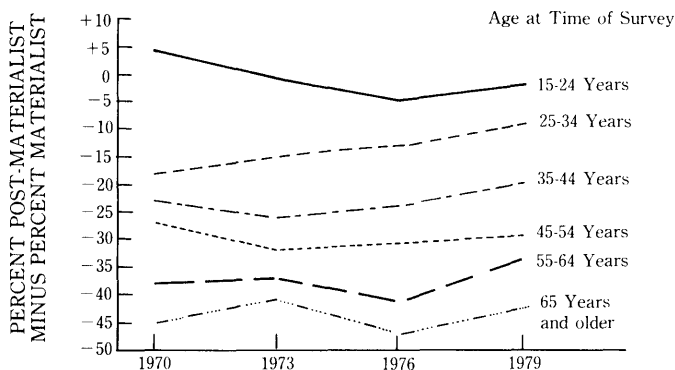
<図・1>

出所：イングルハート（1978）4頁 （三宅一郎・金丸輝男・富沢克訳による）



<図・2>

出所：Inglehart (1981), p.889 :Fig.2



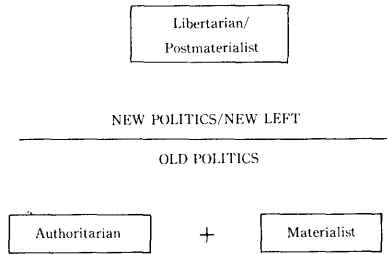
Source: European Community surveys carried out in Feb.-Mar. 1970, Sept. 1973, Nov. 1976 and Nov. 1979 in Britain, Germany, France, Italy, Belgium and The Netherlands: since data from only these nations are available for 1970, only these data are used for the subsequent time points. Surveys were sponsored by the Commission of the European Communities; principal investigators were Jacques-René Rabier and Ronald Inglehart.

. Change in Value Priorities in Six Nations, 1970-1979, by Age Group

出所：Inglehart/Flanagan (1987) ,p.1306 :Fig.7.8.9

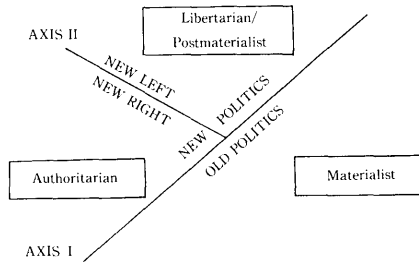
(1) Inglehart's View of Cleavage

Structures in Advanced Industrial Democracies



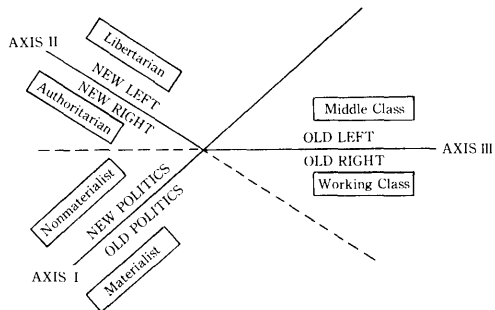
(2) Flanagan's View of Cleavage

Structures in Advanced Industrial Democracies



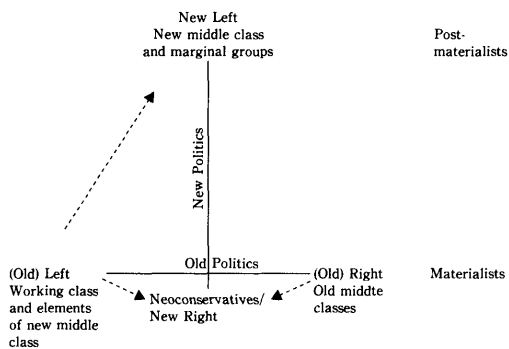
(3) Full Cleavage Structure for

Advanced Industrial Democracies



< 図 ・ 4 >

出所 : Inglehart (1989) ; p.90 :Fig.3



*A triangular model of the political spectrum:
cleavages and forces*

Source: adapted from Offe, 1985: 858